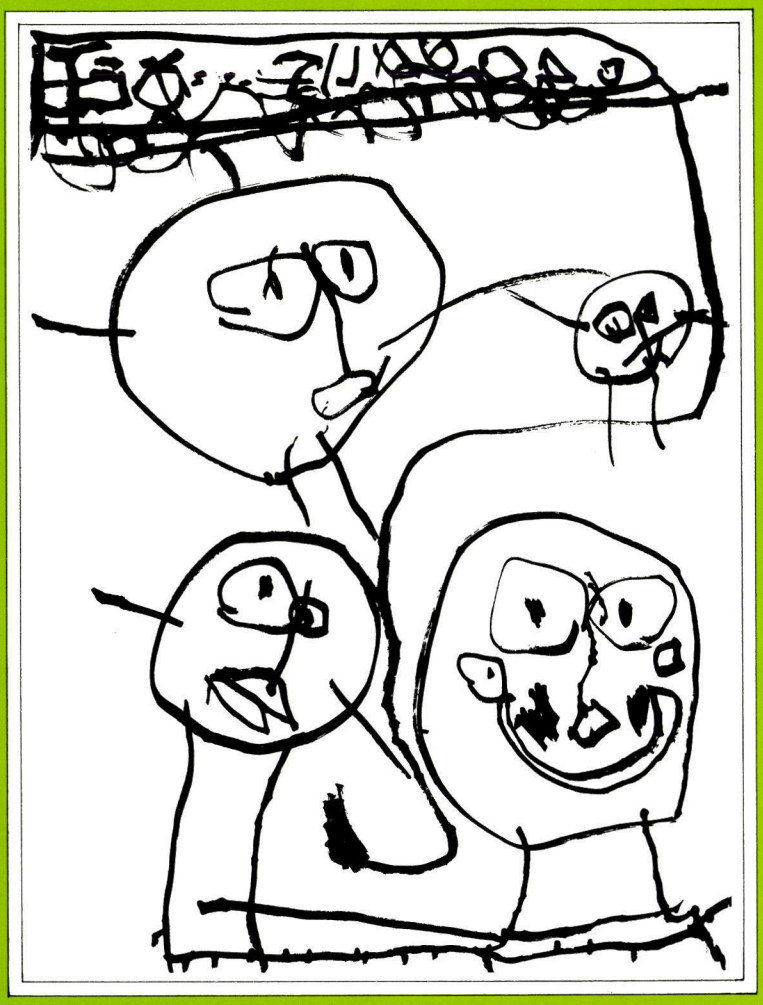
伊豆の地から

いい女といい男たちの　あたらしい風

草の指環



創刊号

特集　座談会

「伊豆とわたし、わたしと伊豆」

永岡 治氏・池谷二郎氏を囲んで

グループ紹介・聞き書き・小説

いいとこみーつけた！　などなど

めっせーじ

ひらい　かずこ

女の子らしく、女のくせに、女だから……
そういわれて　大きくなってきた。
自分の内に潜む人間の声を凍結させたまま
机上の学問と　世間の常識　風習を
あたり前として受け入れてきた。
時には反抗したとしても、ささやかな
それも大人たちの許容範囲内で。

こんな私にも、自分で決め自分で歩き、
自分自身の人生を拓こうとする健全な自立の芽は
枯れずにあった。
それからは　「なぜ？」「どうして？」という疑問を大切に
「常識」で着ぶくれして、身動きがとれなくなった身を
解き放ちつつ、一枚一枚脱皮して行く旅。
竹の子のように、蝶のように、
一枚脱ぐ度に、ぐん　と大きくなる。

あなたの人生の旅は、どんな旅ですか？
厳しく　石ころだらけの道だけど
喜びにあふれ　キラキラと輝やいているでしょうか？

伊豆の地から　いい女いい男たちの「旅」を贈ります。
あなたの心に響き合い共鳴するでしょうか。

もくじ

☆　特集　座談会
「伊豆とわたし・わたしと伊豆」……1
○親と子の会話……6
○私の一冊……7
○童話「鬼ケ島秘話」……8
○聞き書き「四十年ぶりに念願を果たした女」……9
○ちょっと気になる〝イイ男〟……12
○「学ぶということ」－学校と進学塾－……13
○牛乳パックから……14
○ベビイ・カムズ・ストレートダウン……16
○グループ紹介－手をつなぐ太陽たち－……18
○小説「谷神の午後」……20
○「いい場所み－つけた」……22
○「私たちと法律」①……24
○詩「欲張らずにいられない」……25
○「駆け出し記者が行く」①……26
☆　表紙絵
新幹線とボクの家族　磯部雄太（5才）

「田舎の文化」

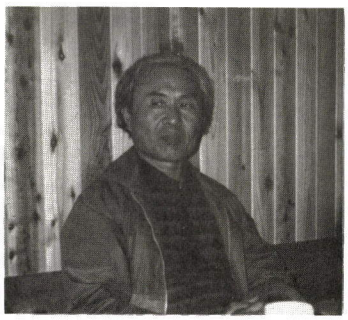
「いなかには文化がなくてつまりませんなぁ」
街から来た人はしたり顔に　いなかに住む人はちょっ
ぴり自嘲の念をこめて、そういう。

いいえ　文化は創るもの
　　文化は生活に根づくもの
例えば、両手にプップッと唾をはきかけて、
　　くるくるくるっと手品のようにわらをなう老女の、
　　まゆ玉から糸をとって　染色して
　　機を織って布にして　着物をつくり出す女たちの、
　　海辺の日だまりで　芸術品のようなトバを編む海女の、
一つ一つに込められた意味と　心と　知恵の結晶を
「文化」と呼ぶのではないでしょうか。

「文化」を美術館や博物館にとじ込めないで！
民衆から切り離された文化は、ただの骨董品

母から娘へ
女から女へ　人間から人間へ
連綿と伝え受け継がれてきた「伊豆の文化」に
新しい生命を吹き込んで、私たちは
受け継ぎ、育て、生活の中にはりめぐらしたい。

ものを生産する　自然と共存する　いなかにこそ
いなかにこそ「文化」はあるのです。



ワイワイ　ガヤガヤ

座談会

「伊豆とわたし、わたしと伊豆」

〈お客様〉

☆**永岡（ながおか）　治（おさむ）氏**

一九三〇年、土肥町に生れる。静大教育学部教員臨時養成科修了。伊豆各地の小学校勤務の後、一九八二年に退職。土肥町八木沢で文筆活動中。

著書　『一年ぼうず』（理論社）　『伊豆土肥史考』（長倉書店）『伊豆水軍物語』（中央公論社）　『海賊のいた入江』（青弓社）『古代東国物語』（角川書店）

☆**池谷（いけやじろう）二郎氏**

一九二九年、大仁町に生れる。韮山中学時代から永岡氏と親交を結ぶ。県立臨時教員養成所を卒業し、田方郡の小学校に勤務。同人雑誌『田方野』の主宰者。

著書　『教師の限界』（教育報道社）　『ひがん花の咲くころ』（静岡県出版文化会）

〈飛び入り〉

☆内田武さん（永岡先生の教え子）－この日のため会社を半どんにして、駆けつけました。

〈その他〉

☆本誌スタッフ　六名

司会　まず、お二人の先生と伊豆との関わりについてお願いします。

永岡　去年解散してしまったのですが「伊豆を愛する会」というのがあって、僕も入っていたのですが、これは伊豆を愛するその一念だけで集まった多様な人たちが、何とか伊豆の美しい環境を損なわずに未来の人たちに伝えて行けないだろうか、ということを微力ながら訴えてきた会です。解散はしたものの、郷土の文献を集めた「伊豆文庫」は広範に利用され、マスコミにも取り上げられたり、その訴えはかなり浸透してきて歴史的に意義のある仕事ができたのではないかと思っています。ただ、伊豆が僕らの考えるのとは違う方向に行きつつあるとはいえるので、淋しく思い、新しい方向をさぐらなければいけないと思っています。僕は土肥で「村おこし」委員をさせられているのですが、これからの観光について、「都会のまねをするな、過疎なら過疎でいいじゃないか。田舎なら田舎でいいじゃないか。それをプラスにしよう」と、まぁ毒づいているわけです。人間がそこへ行ってゆったりできる、夢やロマンを求められる、歴史や文化、人間性が大切にされている観光地じゃないとだめ。人の心が美しいこと、自然を徹底的に守ること、この二つが大切だと思います。まずは序論として。

池谷　僕は山の中（大仁町浮橋）に生まれました。五十二年に転任で母校に帰ったのですが、まず驚いたことは子どもたちの言葉がすっかり変っちゃったこと。僕らが使った言葉を使わない。もっと田舎の良さを残しておいていいのではないでしょうかね。僕は教師を辞めてから、永岡さんの『目で見る西伊豆の歴史』づくりでいっしょに西伊豆をカメラかついで歩きまわり、改めて自然の美しさを感じましたね。

外に向って　ひらける文化

司会　お二人とも、「開発」というより環境を守るということで一致していらっしゃいますが、それはやはり伊豆の風土がそういう先生方を育んできたのでしょうか？

永岡　（うなづきながら）僕は八木沢で生まれ育ったのですが、家の近くに富永氏の丸山城跡があって、そのことが少年時代から僕の中に根付き、夢のようにふくらんで『伊豆水軍物語』として実を結びました。海の城は守りの城じゃなく、攻める城です。ここを基地として出かけて、大きく孤を描いて、外へ向って開けていた。このことが僕の生き方を決定づけましたね。例えば、伊豆と熊野、房総と、陸上の交通を考えれば遠く離れているが、海からだと隣りどうし。海の視点、陸の視点と、視点を変えると全く別のものが見えてきます。又、半島というと陸の孤島のように思われ文化的後進地だといわれますが、昔であればあるほど、日本列島の物流交通の中継地。新しい情報もがんがん入ってくる。むしろ文化の先進地だったといえますね。

一同　うーむ。なるほど。

井田がおもしろい

池谷　僕は山の中の生まれだから、仕事で井田に数年住んだ時、海の存在を痛感しました。道がなかった時代に、なぜこんな不便な所に政治を執る人がいたのだろうか、と。そしたら海があったんですね。井田はおもしろい不思議な所ですね。新しいものと古いものが同居していた。又、いいのりが採れるんですよ。のり採りは家族こぞって海へ出てやるんですが、共同でやって平等に分配する。原始共産制的で、中にはいいかげんなやつもいてサボッたりする。だけどそれがのりを根絶やしにしないで繁殖させることにもなるとか。おもしろいですね。（笑い）結婚式に行く時もご祝儀は後でみんなで相談して、このくらいのごちそうだからこのくらい、と実に合理的というか、生活の知恵だなぁ…と。（爆笑）

小野　今ね池谷先生が古いものと新しいものといわれたけど、井田は「アメリカ村」と呼ばれるほど、昔からサンフランシスコへ出稼ぎに行く人々があったんですね。そういう中ですごく古いものとモダンなものが同居しているんでしょうね。

磯部　私の姉が西伊豆に住んでいるんですが、そこへ行くと新しいもの、違う文化を受け入れる柔軟さがあるんですね。大らかというか。でも、修善寺へ来て感じたことは、ちょっと変わったものを見る目が厳しい。冷たいなということです。たった一つ二つ山を越えただけでこんなに違うのかと…。

永岡　漁村の場合「おつりの農業」で生きてきましたからね。江戸っ子的にいさ

ぎよいところがありますね。又、昔から外へ向って開けていましたから。

小野　海岸部の人から見ると、田方の人はケチに見えたみたい（笑）。

平井　生業の違いなんでしょうね。ところで、「聞き書き」をしていると、おばあさん達の中に、富士山のむこう（山梨）から、白い米を食いたい！　と伊豆を目指してやって来た方が多いんですよ。さっき、生活は厳しかったという話が出ましたが、私にとって伊豆は温暖で豊かだというイメージが強いんです。だから、お二人の先生も自然との共存という考えができるわけで、本当に厳しいと、分っちゃいても自然を切り売りしてしまうのではないかと…。

池谷　こちらも厳しかったが、そこへ来ている。田中山や浮橋に山梨から来ている人が多いですね。私も自分のルーツが知りたくて調べてみたところ武田源氏の流れをくむ武士の祖先たちが移住してきたようです。むこうはもっと厳しかったでしょうね。でも来てみれば、そう楽でもなかった。

みんなで創って行く　文化がうれしい

山口　私は十七年前に東京から来ました。ちょうど『複合汚染』が新聞で連載されていた頃で、夫はプラスチックの研究室にいた為、自然に反することはやめようと脱サラして中伊豆へ来たのです。だから、当然貧乏暮しなんですが、心のやさしい人々の中では何とか暮して行けるんですね。大根や竹の子が知らない間に置いてあったり。若い時はまだ目がなくて、ほしい本が手に入らないのを淋しく思ったり、この地の文化の重層に気づかなかったのですが、近所のお年寄りがずっと念仏でいい伝えている空海の言葉などにハッとして。みんなで守り・伝え、みんなで創っていく文化がうれしいですね。

池谷　永岡さんとあちこち歴史を訪ねて歩いたのですが、韮山も歴史的なものがたくさん残っていますね。それを掘り起こしながら今へつなげて行くこと、その文化を高めて行くことが大切です。文化を拡げて行くのは教師の仕事でもあると思います。これまで残念ながらそういう動きがなかったので、僕たちは『田方野』で呼びかけているんですが。

永岡　『田方野』やみなさんのミニコミなどが地域で根付いて行けば、伊豆の文化がいよいよ本物になってきたということでしょう。去年の秋に土肥でも「土肥の歴史と文化」という講座を教育委員会主催でやったのですが、四十人近くの人が聴講生として出席しました。求めている人はいるんですね。それから松崎に「ホットライン」というミニコミ紙を出している松本さんという人がいます。ユニークな西伊豆の情報が注目されつつあります。ミニコミ同士のネットワークもおもしろいですね。

池谷　呼びかけるものがないからまだ出てこない人が多いのでは？求めている人が、いるはずですよ。

永岡　松崎の松本さんがよくいうのですが、一生かけてすばらしい仕事をした人が地元に埋もれたままだというのですね。そういうライフワークに何とか日のめをみさせたいのだけれど、本にしてくれる出版社がない。そういう時地域の文化団体があれば、みんなでワーッと買って支えることができるんですがね。

池谷　その点浜松には「ひくまの出版」があって、むこうの人たちはずい分助かっているんですよ。こちらでも何とかそういう出版社があれば…。

永岡　まず、受け皿づくりでしょう。買う人が増えれば、出版はどんどんしてくれるようになりますよ。

平井　受け皿づくりができればいい本はどんどんできると。その点ミニコミの役割りは大切ですね。

山口　中伊豆にも町民大学講座というのがあるのですが、コツコツしっかりと学んでいる人は多いですよ。

長岡はバイタリティーにあふれている

小野　伊豆の中でも長岡はこれまでのお話とは全く違う伊豆だと思うんです。先日町の講演会で、百済から来た人たちが長岡へ流入して瓦職人となったため、当時ハイテクの町だったと聞いて驚いているんですが、街は陽気さとバイタリティーにあふれています。しょせんいろいろな人が行き交うので、文化が定着せず、低い文化なのかもしれませんが、その救いようのない低さが、私はとても好き！

（爆笑）

伊豆は文学のゆりかご

山口　作家の小川国夫さんが「伊豆の自然が文学者たちにインスピレーションを与えていい作品が生まれる。伊豆は文学のゆりかごだ」といわれてますが、ここに住んでる私たちは、いつもインスピレーションをもらってるんだから、もっといい仕事ができるはずですよね。（笑い）

永岡　そうですね。でも伊豆出身の文学者は少ない。外から来た人が外部からの目で伊豆を描き、内部からのものというのは、あまりないですね。

山口　慣れちゃうんでしょうね。

磯部　どっぷりつかってると分からないと思う。姉が海へ遊びに行くと、地元の人から、海へ行って何するだ？と笑われるんだって。

永岡　農耕民族は遊ぶことは罪悪だと考えるところがあって、そういわれるのでしょう。でも遊び心がないと文学は分からない。

磯部　遊ばなくっちゃ！

平井　でも、遊んでばっかりでも！

（顔を見合せて笑う）

永田　ここに住んでいると風景が美しいからよそへ行ってもきれいだと思わない。感激できないんですね。どっぷりつかっているとぬるま湯ですね。自分が本当にそういう気持ちにならなきゃあ、自然から何かもらえないと思うんだけど……。

生活の中に文化を育てたい

池谷　僕なりに思うのですが、人間をより高度に人間化していく働きが文化ではないかと、芸術をはじめ文芸誌とか全てを含んでですが。

永岡　文化と言えば、学校の教育というものにすごく大きな責任があると思うのですが、現実を見ると、やはり心ある親たちが、小さい時から優れた音楽や、本、美術を与えていかないと情緒性も育たないし、夢もロマンも失くしてしまいますね。

平井　池谷先生が、子供達が方言を話さなくなったとおっしゃっていました。言葉というのは文化だと思うんですよね。永岡先生の本にもあったのですが、標準語に直せない方言ありますよね。そういうのは地方の財産だと思うし、大切にしなくちゃいけないと思う。言葉がなくなると文化が貧しくなると…

磯部　今のより人間的にということともつなげてみると、大人の価値感が、物とかお金・外見に片寄りすぎているのが、子供に影響していると思うんです。あと、テレビの影響も大きくて。私は絵本の会に参加しているんですけど、子供に読ませたい本が、本屋さんになかなかありません。

平井　売れないからなんですよね。

磯部　売れないからおかなくなる…

石田　売れないと言われましたけど、本当に売れないかと思うの。もうちょっと信念を持って辛抱すれば、もう少し頑張れるんじゃないでしょうか。

磯部　買う方の責任も大きいね。私は、絵本がどんなに大事なものを子供の心の中に育てるか知らなかったから、前はひどいものを読んでいました。だからもっと多くの人にも、知ってほしいと思ってますけど。

永田　私はそれだけではないと思うの。インスタント食品なんかができて生活が単純化してくると、やっぱり目先の事に捉われすぎて、時代の流れを考えてちょっと待って！なんていうことが面倒になるんじゃないかな。

永岡　優れた文化といっても、親自身が、何が優れているかわからなくなってきているんですよね。問題を抱えた大人が多くなっているんです。

小野　やはり、先生方がおっしゃったように、より人間的にという点を考えていかなくちゃならないんじゃないかしら。

平井　そういうヒントが伊豆にはいっぱいある。私は、都会ばかりだったから伊豆にきて、カルチャーショックというか、女性史にも出逢えたし、こう、季節のめぐる中でその時々の知恵を使ってホントに個性的な生活をするおばあさん達に、文化を教わった気がしました。縄ないなんかも知らなくて、両手にペッペッとやって（笑い）もうカッコよくて手品みたい（爆笑）私なんか生活力ないなぁ、ただ、使って捨てるばかりの何て貧しい生活をしていたんだろう、て。伊豆は私にとって、恩人という感じなんです。

小野　うわぁ…すごい。そのお話には、カルチャーショックを感じるわ。

池谷　昔の生活は、自給自足ですから全て自分で造りました。生活に個々の特徴がでていましたよ。

磯部　子供の中にもありました。今では勉強ができないと落ちこぼれだけど、私達が小さい時は、村が小さかったせいか、個人の生活まで見えちゃうんです。あいつは勉強はだめだけどメンコがうまい。とか、鼻たらしで汚い。でも、家の手伝いをよくして偉いみたいな。認めるものが一つでないから、わりとさばさばしていました。

永岡　だからこそ、一芸に秀でた人間が大いばりで生きていける伊豆にしたいんですよね（ナルホド）

出逢いというのが大切だと思う

平井　先生達は、昭和四－五年頃のお生まれで、戦争の時池谷先生は予科練とか行かれて、その後で戦後先生になられた。一番民主的な時に戦後の反省と共に、日本が頑張ろうという時先生をされて、綴り方とか、教育に燃えてらした。で、当時の教え子の方、どうぞ！

内田　小学校5・6年頃お世話になって、僕は悪かったんです。教科だけでなく、今言われた思想とかが僕の中に残っています。

永岡　土肥から修善寺にきて最初の教え子です。

内田　当時、まだ下狩野村だったですね。今の東小だけど、人間て出逢いが大事だと思う。

平井　今日内田さんは仕事を午前中で終わらせて駆けつけて下さいました。

一同　どういう先生かわかる気がしますね。

山口　私は、戦後すぐ小学校一年生になったんですが、小学校時代は自由平等だとか博愛主義を教えられて、自分たちでグループをつくって研究したりしてとても幸せな日々だったと記憶しています。

永岡　教師になったのは昭和二十四年かな。民主教育の高揚期で、憲法や教育基本法ができて皆平等で、まっしぐらに進んでいた時でした。

池谷　僕なんかの時代は、デモシカ先生という言葉があったぐらい先生になりてがなくて。

永岡　給料が安かったですよ。あの頃は初任給三百円ぐらい。本一冊買えばなくなっちゃう。（エーッ）

池谷　僕は昭和二十六年の新任。二－三千円ぐらい。姉の旅館の女中さんの半分でばかにされました。先生なんかばか臭い時代から、それじゃいかんと政治が入って給料あげた。そうすると皆が集中して成績優秀な人がなるようになった。そして今の混乱期です。

永岡　給料があがると規制ができてきて、自由がきかなくなる。こと細かにこうしなさい…と。

池谷　授業時に外へ出ようなんてことが、今では一時間でも校長の許可がいる。

内田　僕らの頃は、しょっ中つれていってもらった。

永岡　社会科なんか、外でやってた方が多いね。

平井　永岡先生は、文学とか歴史に力をいれて－

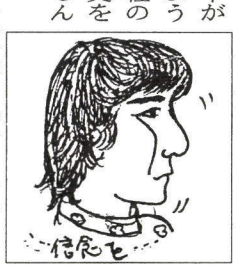
内田　定期的に作文や詩の文集を作りました。

池谷　永岡先生は当時、田方の先端きっての綴り方の先生で、僕も仲間に入ってました。全国的に知られた実践もあって－

太宰治に魅かれて

石田　あの、お話を変えて申し分けないですけど、永岡先生は、太宰治が大変好きだったとか。

永岡　影響が大きいですね。高校時代ですけど、太宰のものはほとんど乱読しました。一番好きなのは『津軽』で太宰が旅行記のような形で津軽の風土と歴史を綴っているんです。



こんなものを伊豆でも書けないかと思って郷土史をやり始めました。土肥小に勤めるようになって、子供達に教えたくても郷土の歴史の参考になるものが何もない。で、自分で文献をさがして簡単にまとめたんですが、もっと正確に内容豊かにしないといけないと思って書き直したのが『伊豆土肥史考』という本になりました。（ウーン、そうだったんですか）僕は、当時すごく内気で、その自分の心を代弁してくれるようなところが好きだったんです。

平井　いろいろ思いがけない話や楽しい思い出を語っていただいて、まだ言い尽くせない思いもあるかと思いますが、そろそろ時間としたいと思いますが、最後に何か伺いたいこととかありましたら…

磯部　あの、池谷先生もずっとこういう仕事をされてきて、ご自分をここまで支えていらしたものは何だったのか伺いたいんですが……生活のモットーとされていることとか。

池谷　僕は、やはり、より人間的に生きていきたいということでしょうか。向上していくのが人間だと思ってますから。それと、皆さんに。こういう事を始めると当然月日と共に人や雑誌の消長があると思いますが是非続けていってほしいと思います。

永岡　そうですね。時にはガリ刷りになっても続けていくことが力をつけ、認められることだと思います。是非、がんばって下さい。

一同　ありがとうございました。

――あっという間に楽しい三時間が過ぎて一同、それぞれ思いを新たに帰途に着きました。風の冷たさが上気している頬に快かったです――

平井　広島県出身　修善寺町在住
山口　郡馬県出身　中伊豆町在住
小野　静岡県出身　伊豆長岡町在住
磯部　静岡県出身　修善寺町在住
永田　静岡県出身　修善寺町在住
石田　静岡県出身　中伊豆町在住
斉藤　静岡県出身　大仁町在住

親と子の会話

（毒リンゴの毒は農薬？）

母－「…というわけで、白雪姫はリンゴをかじったとたん、バッタリと倒れてしまいました。」
娘－「あーあ、皮をむかないで食べるからよ」
母－？
娘－「だって農薬がいっぱいついてるんでしょ。それで死んだのよ」

あすな（三歳の時デス）

積乱雲の色は？

「お母さん。雲って黒い雲が白い雲になっちゃうの」
「どういうこと」
「あのね。積乱雲て雨を降らせる黒い雲でしょ。それで雨を降らせた後、白くなっちゃうのかなぁーと思ったからさ」
「ふーん。お母さんも知らないんだ。明日学校で先生に聞いてごらん。それでお母さんにも教えてよ」
「うん」

（ちびくろサンボのバター）

母－「ぐるぐるぐるぐるまわって、とうとうトラはとけてしまい、おいしそうなバターになりました」
娘－「じゃ、うちのバターも、もとはトラだったの?!」
母－「うーん……ソウカモネ…」

（胎内の記憶）

母－「お母さんのおなかの中にいる時どんな感じだった？」
娘－「あのね、暗くてきゅうくつだった」
母－「あんた、覚えてんの?!」
娘－「やぁねー　じょーだんよ」

あすな（なまいき盛り五歳）

JEANS SHOP
CHIKUMA
■松崎店 05588-2-2402 ■修善寺店 0558-72-6522

新美南吉童話全集（大日本図書）

室野英子

もう二十年近くなるけれど、近所の小学生の教科書で、初めて「てぶくろを買いに」や「ごんぎつね」に出会った時の印象は今も鮮かです。

読んでいて、せつないほど哀愁を感じるけれど、土のにおいがしてどこか暖かくてやさしい……。

国語の本に、こんなステキな童話が載ってるなんて驚ろき、新美南吉ってどんな人なんだろうと興味をもちました。

初めて母親になったばかりで、まだそのころは柔かい母性愛のホルモンがたっぷりだった私は、とにかく物語的要素に富んでいてユーモラスで、しかも味わいが深い、南吉の童話のとりこになっていました。

ある時、新聞で南吉全集（三巻）が出版されることを知り、当時貧しかったけど、貯金のつもりで買い求めて以後大切に読んだりながめたりしています。

きつね、犬や牛などの動物、お百姓さん、おじいさんや、坊さん、盗人、少年たち、かぶと虫などの昆虫、ランプやうた時計などの道具、「いぼ」や「嘘」や「屁」「耳」「天狗」など、いずれも取材がおもしろくて、構成がとてもうまくて、ちょっと古風で、謙虚な感じがするけれど、人生の深いところをついている。

人間の優しさ、いとおしさを教えてくれるメルヘンの数々です。

南吉は、惜しいことに三十才の若さで昭和十八年に亡くなっています。

青春の生々しい感性が、数々の童話となって残っているとしても、三十才で結核で没したのは何とも気の毒というほか、ありません。

（修善寺読書会）

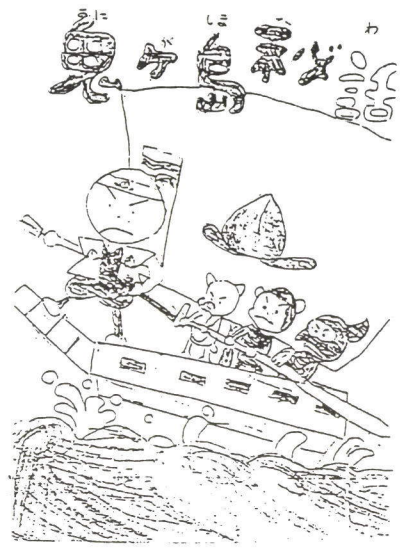
『女たちのアジア』松井やより著（岩波新書）

齊藤　みち子

“豊かな香りをただよわせる一杯の紅茶。あなたはここから、何を感じとるだろうか。松井さんの目を通すと、そこからは汗をしたたらせながら黙々と葉を摘み、自らは決してうるおうことのない無国籍タミール人の顔が見えてくるという。”こんな書き出しの、あるキリスト教新聞を目にしたのが、私にとって彼女の名前を意識した最初である。それから彼女の著書「魂にふれるアジア」（朝日新聞社）、「女性解放とは何か」（未来社）等を読み、昨年は開発教育研究集会に於て、松井さんの問題提起を聞くことができた。朝日新聞社の記者である彼女の“市民と援助・西欧の第三世界運動”や“消えゆく熱帯雨林・ボルネオ島からの報告”の連載は特に興味深かった。松井さんは、売春観光、戦争責任、日系企業の女子労働者など、女の視点でアジアと日本のつながりを告発しなければと思い、「アジアの女たちの会」を友人達と結成した。そして、事ある度に社会に大きな波紋を投げかけている。

最近では、岩波新書より『女たちのアジア』を出版。アジアの特派員となった著者が、各地で出会った女性達の肉声を伝えている。アジアの女性達は三重の抑圧に苦しんでいるという。南の第三世界に生まれて、北の先進国の経済的、政治的、軍事的支配を受け、勤労者階級として、自国の独裁政権や特権階級に抑圧、搾取され、さらには家父長制の伝統の中で男性による性差別を受けている。しかし、どの国でも苛酷な状況に立ち向かい行動している力強い女性達に出会うことができたという。フィリピンでは、マルコス独裁政権のもとで投獄され、果敢な抵抗を続けてきた女性達、日系企業が最も多い輸出加工区でストを決行した女性達。インドではダウリー（持参金）殺人やレイプ反対闘争が全国的に広がってきている。タイ、フィリピンでは女が商品化され、性的搾取をされている。イスラム圏では、チャドル（ベール）とチャドワリ（室内）に閉じ込められていた女性達が声を上げ始めた。韓国民主化をめざし行動している母達。私はこの本を読んで、アジアの女性達の置かれている苛酷な状況に改めて驚き、怒りがこみあげてきた。と同時に日本の経済発展がアジアの人々の苦痛の上に進められていること、そのなかで安住している自分自身の生き方を厳しく問われているような気がした。

一杯の紅茶にはスリランカのプランテーションで茶を摘む女性達の嘆き、その苛酷な労働をしぼり取って高利潤をむさぼる先進国多国籍企業、そして飽食の先進国の消費者、という南北のつながりが秘められている。あなたはこの本を読んだ後に一杯の紅茶から何を感じとるだろうか。



鬼ケ島秘話

石井登喜男

私は、今から一〇〇〇年程昔、桃太郎という子供に打ち負かされたといわれている鬼ケ島の鬼です。歴史や物語は、勝利者が都合のよいように作りかえてしまい、事実は歪められて伝えられています。勇猛をもって鳴る鬼一族の名誉のためにも私の真実のさけびに耳を傾けて下さい。　私達鬼の家族は、鬼ケ島で平和な暮らしを営んでおりました。海辺で魚や海草を採り、陸では粟やひえを作り、子供とオニゴッコをしたりの日々でした。ところが、ある晩、背中に日本一などと書いた旗を立てた小僧っ子が平和な暮らしをメチャメチャに踏みにじったのです。土足のまんま踏み込んだかと思うと『鬼は外！』とどなりながら私達鬼仲間では、あのエイズよりも恐れられている大豆を投げ始めたのです。一番悲惨なのは美しい妻でした。入浴中でしたので、全身豆の直撃を受け、火ぶくれだらけとなって即死しました。桃太郎の話の中では、私達はパンツ一枚の姿が描かれていますが、全くのデタラメです。人間と全く変らない衣服を身にまとっています。私らがいかにも野蛮な生き物であるかのように悪意を込めて、作りかえたに相違ありません。私は晩酌中でした。子供三人を抱えるようにして、死にもの狂いで暗闇の外へ飛び出し、子供を安全な場所に移しました。

なあに、鬼仲間で最高の超能力を身につけ不老不死の術さえも会得したスーパースターの私にとって犬・猿・きじめらは赤子の手をひねるも同然です。猿なんか顔面に一発パンチを見舞い、尻っぺたを蹴とばしたらヒイヒイ泣いて逃走しました。顔と尻にその時の跡が赤く残っているでしょう。ブタのような姿だった犬も口としっぽを持ってひっぱったらとがった口、長い尾に変身してしまいました。しかし桃太郎の隠し持つ豆には手も足も出ません。加勢？・とんでもない。島には三戸、十三人の鬼しか住んでいません。『オニサンコチラ』というでしょう。隣の家まで三里もあるんですよ。

翌朝、明かるくなるのをまって、大豆を踏まぬよう恐る恐る家へ入ってみると、あいつら、家財道具一式、全部うばって、姿を消していました。

妻のむくろの前で目に一杯涙を浮かべ、私は桃太郎に復讐することを誓いました。しかし、残された子供の養育に十五年かかりました。子供が一人前になると、船を作りいさんで島を出ました。しかし、不運にも航海術にたけていなかったので、あちこちさまよい、目指す日本に着いたのはそれから更に十数年後となってしまったのです。やっと桃太郎の居場所をつきとめ、乗り込んだ時には桃太郎は鬼籍に入っておりました。桃太郎の墓の前で、私は号泣しました。オニの目にも涙などと言ますが、鬼はとっても心やさしいのです。人は見かけによらぬものとか申すでしょう！

そんな訳で、私は失望、落胆の余り自殺も考えたのですが、不老不死の能力を備えたために死ぬことはできません。打ちしおれている私に「おじさん！オニゴッコしよう！」可愛いいお嬢さんが声をかけてくれました。

私はそれからというものは超能力で人間に姿を変え、心やさしい子供達のために紙芝居屋を始める決心をしたのです。私と同じ超能力を持つ仲間は仕事の鬼となったり、勝負の鬼、鬼刑事などとして活躍中です。彼等と比べると私は持てる力を充分に生かせず、汚名挽回も果たせず不甲斐なさに涙する毎日です。しかし、私は子供と一緒にいる時が一番幸わせなのです。『黄金バット』『ターザン』『ベルサイユのバラ』等、次々と手がけて参りました。けれども『桃太郎』と『一寸法師』の話は絶対しません。そして最後に必ず桃太郎の不正を訴えます。子供等は熱心に聞いて、私の話を判ってくれるのです。

紙芝居をしてあちこち廻ると不思議なことにどの犬も私を見ると猛烈に吠えます。いつぞや子供達と動物園に行った折は、猿が異常に興奮し私目がけてオリの中からつかみかかろうとしたり……。昔の怨みが忘れられないのは私とて全く同じです。

もしも皆さんの町で桃太郎の悪口を云っている紙芝居屋さんと出会ったらそれは私なのです。お友達をさそって拍子木の廻りへ集まって下さい。

（カットは小二の娘が、絵本を参考に描きました。）

《聞き書き》

四十年ぶりに念願を果たした女

平井和子

一九八五（昭和六十）年七月二十八日。兼子ナミエは成田空港に中国民航機で来日した潘素坤（パンスーコン）さんを迎えた。敗戦当時の旧満州で子どもを三人連れて困窮していたナミエを助けてくれた中国人の娘さんを招き寄せ、家族で歓迎し、心ゆくまでお世話したいという彼女の念願が四十年ぶりに実現したのだ。

戦後の混乱の「満州」で棄民同然だった邦人たち。敗戦を機に日本人と中国人の立場が逆転し、家や財産を失ない、食う物もなく、伝染病でバタバタ皆倒れていった。そんな中で彼らにとっては憎いはずの日本人を助けてくれた潘さん夫婦に、ナミエはどうしても会ってお礼がいいたかった。この思いが四十年間、彼女をつかんで離さなかった。ナミエが探しあてた時、潘清沢さんは既に亡く、妻の玉清さんも寝たきりで、せめてもの恩返しにと、娘の素坤さんを日本に招くことにしたのだ。

再会を喜ぶ二人（成田空港）

・「人間同士たいで、つき合いたい」

ゆったりとすまし顔で流れる狩野川が、時々あばれ氾濫して何千何百年かけてつくった田方平野の真中、韮山に根を張る兼子ナミエは、大正五年佐賀の鳥栖に生まれた。生家は商家で、七人兄弟の五番目。鳥栖といえば、タイヤが思い浮ぶが、戦争が激しくなると原料のゴムの輸入が困難となり、古タイヤを砕いて再生していたのを覚えているという。

九州の人々にとって、大陸は近い。「朝鮮まで関釜連絡船で、たった八時間ですよ」とナミエはいう。誘われるままに軽い気持ちで、「ちょっと行ってくるね」と、九州の逞しい女たちは明治の時代からつぎつぎと大陸へ渡って行った。

姉夫婦の転勤について、チャンスとばかり「満州」へ行くことを決めたナミエに、母は心を痛め、「行ってみてむこうに合わないならすぐ帰っておいで」を繰り返した。が、「満州」に来てみると、中国料理はおいしいし、見学に行ったゴム会社でも人手不足なので是非働いてほしいと歓迎され、「上機嫌で、そのまま八年間」。一九三九（昭和十四）年、ナミエ二十三歳の時である。

奉天から満鉄で一時間程奥へ入った辽阳（りょうよう）という森の都の、昔クロポトキンが住んだというお屋敷のすぐそばの社宅に入り、ナミエはゴム会社の研究室勤務となった。研究室には中国人男性が二・三人いて、ナミエが入社してすぐ考えたことは、「この国の人々はどんな習慣かしら？」ということだ。「工業的レベルは日本の方が上だけれど、同じ人間同士たいで、つき合いたい。まず相手の言葉を覚えなくっちゃ…」と考えたナミエは、日本語のできる同僚の中国人に、「私に中国語を教えて下さい」と頼んだ。「同じ人間同士…」というナミエの考え方は、母親の生き方から学んだものだ。浄土真宗の信仰厚く、人間を大切に思う母の姿は、無言のうちに彼女に、「言葉だけじゃダメ。生き方で示さなきゃ」ということを教えていた。邦人たちは、中国人に対して優越感を抱き「満人」と呼び、「よくはたいていた」とナミエはいう。その度に被征服者である彼らは「没法子（メイファーズ）」（仕方がないさ）と唱え、じっと耐えていた。

まもなく、ナミエは同じ工場の警備係をしていた人と結婚する。この頃、農場をやっていた潘さんは工場へ人糞の汲取りに来ては、そのお礼に白菜、赤大根などの野菜を安く置いて行っていた。工場では、「通門表」のない者は内へ入れてくれない。それを忘れてきた潘さんが一里先からてくてくやって来る姿を見て、ナミエの夫は、「せっかく遠い所を来たのに…」と考え、「今日はいいから入りなさい」とこっそり通してあげ、これを機に潘さんとの友達づき合いが始まった。

ナミエは戦後になって、潘さんの娘素坤さんから、夫がよく訪問しては水餃子をごちそうになったり、当時六歳だった素坤さんを抱き上げて高い高いをしたりしたこと、狩りに行く為に大馬車を借りたり、釣って来た魚をあげたりしたことを聞かされ、感慨を深くした。

・「言葉が分かるってありがたいなー。」

敗戦直前の一九四五（昭和二十）年八月三日、急きょ夫は召集され、機械銃隊として朝鮮へ向けて発っていった。ソ満国境にでんとがんばっているはずの関東軍はいつの間にかもぬけのからで、民間の男たちは根こそぎ召集され、残された女、子ども年寄りだけでの逃避行は、聞く者の胸をえぐる惨劇を生み出した。ふって湧いたようなソ連軍の進撃、敗戦によって立場が逆転し、怒濤のようにおしよせてくる中国人たち。このような極限の中で「中国残留孤児」たちは生まれ、敵国であった中国人たちによって育てられた。辽阳（りょうよう）の街にもソ連兵がドッと入って来て、両手を広げて、「一時間以内にここから立ち退け！」と命令される。この時ナミエは四歳と三歳の男の子と、お腹に三人目の子どもがいた。ころげ込むように会社へ避難し、ミシン工場へアンペラを敷いて共同生活が始まる。

夜になると、ソ連兵が強姦にやって来る。中国人の中にもお金をもらって手引きする者も現れた。ある晩、若い娘と子持ちの女性が連れて行かれようとした際、自らハサミでのどを突こうとしたが、払いのけられ引きずって行かれた。抵抗すればその場で殺害されるので、誰も何ともすることができない。ソ連軍は参戦に際して、関東軍の抵抗を予想して「捨て駒」としてシベリアの囚人を先頭にたてて進軍してきたといわれている。長い間閉じ込められていた男たちのうっ憤は、無防備の開拓民や女子どもに向けられた。民衆を守るべき軍は役割を果さず、日本政府は「終戦」を少しでも有利にするための画策に奔走するばかりで、まず外地の邦人の安全を考えるべきなのに怠った。在満の日本人が、「棄民」といわれるゆえんである。

女たちは坊主頭にし、顔にスミを塗りたくった。新京で難民生活をした体験を持つ中伊豆町の佐藤よしいさんは、邦人の男たちが交渉し、遊郭の女たちに身代りになってもらったこともあったと語る。「では私たちが…」と、売春婦たちが「すすみ出」て、「その犠牲の上に私たちは守られた」と証言する人は多い。しかし、それもまた、やりきれない。

共同生活では、解放されてすぐ夫が帰ってきた人は幸せで、子どもを抱えて女独りの人は肩身の狭いみじめな思いを嘗めさせられた。虱によって伝染するチフスで、栄養失調で、弱い者からバタバタと死んで行く。死体は大きな穴に投げ込まれ、まだ生きている者によってあっという間に丸裸にされる。こういう中で潘さんは、召集前に夫からナミエたちを頼むといわれたからと、彼の家へ来るように勧めてくれたり、卵やモチやこうりゃんを持ってきてくれたりした。生まれたばかりの赤ン坊が下痢の時には、もち粟を持参し、水を少々入れてたくよう教えてくれた。「粟は粟でも、質の悪いのをくれるのが普通なのに、自分たちだって困っているのに、潘さんは上質のもち粟をくれた。日本人にこんなことができるでしょうか。大陸的な広い心がどんなにありがたかったことか」という。

街には、破壊された工場や店などから物を寄せ集めてバラックを建て、何家族もが共同で暮すようになっていた。男と女、他人同士でも一組ずつセットになって夫婦のように見せかけ、お互いの身を守っていた。ナミエの住み始めた満鉄社宅のまん中に、国府軍（将介石軍）の糧まつ係が来て住み込むようになり、「ショウハイライライ」と長男を呼んでは、唐米のご飯や卵・肉などをくれた。ある時、ナミエが、「どうして日本人にくれるの？」と尋ねると、「私も召集されて来たが、いつもふる里の子どものことを思っている」という。カンメンポウやコンペイトウの袋を差し出しては、「お廻りしてワンといったらくれるよ」と、子どもをかまったり、半日遊びに連れて行ってくれたりもした。一度、彼が「この子を連れて行ったらどうする？」といったので、ナミエはびっくりして「ダメダメ」というと、「ウソウソ」と笑っていた。こういうやりとりの中でナミエは、言葉が分かるってありがたいなーと痛感していた。

・戦後

夢にまでみた引き揚げ。一九四六年七月十四日、宇品港着。一たん九州の実家へ身を寄せたが、九月には夫の生家、伊豆の韮山へ。「一度結婚して家を出ると帰りずらい」とナミエはいう。

しかし、戦後の生活難、夫の生家でも大家族で、

ナミエたちは物置きに身を置き、とにかく何でも「はい」、というしかない生活が始まる。農作業は初めてで見よう見まねのナミエが疲れ切って野良から帰ってくると、無邪気な実家の子どもが、「おばちゃん、次はお便所の掃除」。子どもたちもおやつや食事で区別され、「お代り」とおわんを差し出しても、空のまま…という状態で、なさけなくて毎晩ナミエは枕を濡らした。「くやしくて、つらあてに死んでやろう！」と、本気で駿豆線に飛び込むことを考える日々だった。

一九四七（昭和二十二）年三月、「センサクハゲンキ」というハガキが九州の実家へ届き、ナミエの許へ回送されてきた。夫が帰ってきた時、ナミエは物置きにいて、「兄さんが帰って来た！」と弟嫁がいうので、義兄が山の仕事から帰ってきたのかと思ったら、復員してきた夫だった。すっかりやせこけ髪がまっ白になっていた。シベリアへ抑留され、強制労働のノルマを果たすため病気でも働かされ、夫は妻と子どもの写真を持って雪の中をフラフラさまよい歩いたこともあったという。ナミエは、夫が帰ってくるまではと、とにかく死なずにがんばってきて良かったと、ホッとひと息ついた。

戦後、働きに働いた頃をふり返ってナミエは、「いつもピーンと張りつめていた。若いからできたんでしょうね」という。毎日夕方になると沼津へ魚の開きに出かけ、夜中に帰ってきてそのまま倒れ込むように寝て、少し仮眠をとったくらいで起き出して、又一日が始まる。そういう忙しい生活の中ではあったが、いつも夫と二人でお世話になった潘さんたちのことを話し合い、「お礼がしたいね」という思いをつのらせていた。が、一九七七年、夫は思いを果たせられないまま腸ねんてんで亡くなった。初めて一段落ついてホッとした時、ナミエは息子（満義さん－満州に義理を忘れないの意）に教えられて日中友好協会へ入る。協会を通じ、あれこれ手を尽して潘さんたちの消息を探してもらうが、まだ旧満州へは自由に旅行できない時代だ。潘さんたちのことは一向に分からない。たまたま次女（節子さん）が特許庁に勤めていて、そこの中国人に相談して公安局を通して調べてもらって、やっとつきとめることができた。

ある日、仕事を終えたナミエが横になっていると、息子がポツリと「東北へ行ってくれば？」という。ちょうど東北新幹線が開通した時だったので、日本の東北かと思っていたら、中国の東北区だという。ナミエは思わず起きあがった。静岡三十四連隊戦友会の旧満州旅行に欠員が出たため、急きょ参加できることになったのだ。四十年近く胸の中で念じていた「お母さん（潘さん）に会いたい！」というナミエの思いが、いよいよかなえられることになった。

・実現へ

一行が瀋陽（奉天）に入った時、ナミエはお昼の一時間だけもらって、手配された市役所の車で潘さんの許へ急いだ。途中、「本人と違う人だったらどうしょう？」という不安がよぎる。今は、下半身不随となり、入口で迎えてくれた潘さんは、まぎれもなくその人だった。

潘さんの娘素坤さんを日本へ呼び寄せるための、気の遠くなるような手続きは、日中友好協会東京の“あけぼの会”の会長さんが代行してくれ、息子夫婦もよく理解して歓迎してくれたこともナミエにはうれしかった。孫たちは中国語を勉強して、素坤さんと少しでも話をするのだと顔を輝やかせた。

・戦争について

「これだけは命をかけても阻止しなくては！」とナミエはいう。「自分の国だけでやって行けばいいのに、他の人の国まで出て行って…」「あちらでは『満州』という言葉は使えません。戦友会の人たちもそっとホテルの部屋の中で戦友の冥福を祈っていました」という。ナミエは熱心な立正校正会の会員でもある。その機関紙の沖縄戦の記事を指さして、「日本の本土より遠く離れた地域の人々ほど悲惨です。本土の捨て石にされたんです」と口調を強める。

「満州」を考える時、それはただ被害者意識だけでは語れない複雑な状況がある。四十年たって「マーマ、私に会いに来て！」と来日する「残留孤児」たちの存在は、「戦後世代」の私たちをも捕らえて揺すぶる。「なぜ私たちは生み出されたのでしょう？」「なぜ、中国東北区に日本人がたくさんいたのでしょう？」と。このことを抜きにして、反戦・平和は語れない。

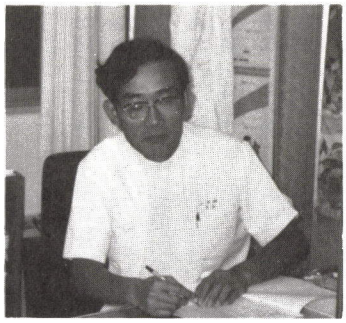
敗戦時の旧満州で、それまでの生き方＝（対中国人との関わり方）によって、中国人に助けられ無事帰国したという話はよく聞く。しかし、そのお礼を実現させたナミエの心意気が、うれしい。

（一九八五年聞き採り）

かずことのぶこのハラハラドキドキ!!

〈訪問インタビュー〉 ①

"ちょっと気になるイイ男"



（いつもコーヒーの香りのする診察室で）

伊豆日赤（修善寺町） 小児科医師

木谷 洋 さん（37才）

「子どもの体のこと、たっぷり話を聞いてくれてたっぷり相談ができる」「薬の内容、種類もきちんと教えてくれる」と、地域の母親たちの強い味方、信頼厚い、木谷先生を第一回目の"イイ男"に選ばせていただきました！

—あなたが第一番目の"イイ男"に選ばれました。おめでとうございます！

Ⓐそんなにイイ男でもありませんが……（と笑顔で謙遜される）

—なぜ、医者に？

Ⓐ富山県の生まれですが、子どもの時体が弱くて、近所のやさしいお医者さんの影響で。この先生は今でもやっていらっしゃいますよ。—

—修善寺には、いつ？

Ⓐ一九八一年の四月ですから、今年で七年目です。

—ご家族は？

Ⓐ妻と子ども（二歳）です。近く子どもが一人増える予定。

—恋愛ですか？

Ⓐ**はいっ！**（はっきりと）

—父親になってから仕事への姿勢が変わりましたか？

Ⓐ独身の時とはずい分違いますね。親の気持ちが察せるようになりました。が、夜間の急患には、昔ほど自由に出られなくなりました。

—先生は薬を乱発しない。薬の内容を説明して下さるということでお母さんたちに信頼が大きいようですが。

Ⓐ日赤にいるということで、ある程度、保健点数制度からは自由ですね。それと、自分なりに自信を持って薬を出しているつもりです。

—逆に、「注射をして」「薬を出して」というお母さんも多いのでは？

Ⓐええ、しかし、例えばカゼの場合、原則として注射はしない。薬もいらない。が、症状によっていろいろな感染症などの難しい問題があって、数種の薬を出しますね。

—趣味は？

ⒶSF小説を読んだり、映画を観ること。

—休日の過し方は？

Ⓐいつも妻が家の中のこと、育児を一手にひきうけてくれているので、休日は妻を解放してあげて、「子守り役」です。

—女性観は？

Ⓐ染色体が一本違いますからね。ずい分違うと思います。犬と猫より男と女の違いは大きい。理解し合うのは大変でしょうね。

—先生の根本にあるものは？

Ⓐ基本は、誠意を持って事に当たるということでしょうか。

—ありがとうございました。突然おしかけて、ぶしつけな質問、お許し下さいませ、ませ。

あなたのまわりに"イイ男"がいらっしゃいましたら、ご紹介下さい。のぶことかずこは"イイ男"のためならどんな所へでも駆けつけます。よろしく。☆☆☆☆☆

（親子の会話）

「お母さん、あのね、Mちゃんちお母さんは怒ると『オニババァ』になるんだって」

「そうお？ こわいねぇ、ところであんたはなんて言ったの？」

「あのね、ツバブタ」

「!! エッ？ なになにもう一度教えて」

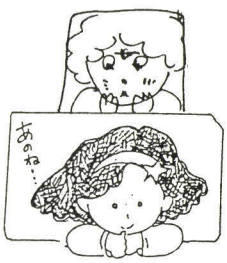
「ツバブタ」

「ドウシテ？」

「だってお母さん怒るとパッパッとツバを飛ばすでしょ。それから太ってるでしょ。だから、ツバブタ」

「アッハハハハ……。」

もう言葉にはなりません。けだし名言。せいぜい気を付けなくっちゃ！



学ぶということ ①

滝　義明

「学校」と「進学塾」

ぼくの手もとに「静岡県ＰＴＡ新聞」（二五三号）があります。その中に、学習塾に関する調査と結果より、として、今春に日本ＰＴＡ全国協議会が文部省の委託のもとに行った調査についての紹介がされています。

アンケート結果の一部とともに、「通塾の過熱化是正の考え方と問題点と考察」という囲みがあります。この文が日本ＰＴＡの報告書の一部なのか、このＰＴＡ新聞の編集室で書かれたものか、明記されていないのですがいずれにせよ「教育」の管理をする立場の人によって書かれたものだと思いながら、読んでみました。

どうも、学習塾批判として書かれているようなのですが、読んでいるうちに妙な気持ちになってきました。

「父母は受験戦争の激化から、学力の補充を安易に学校以外の専門家に委ねている現状がある。父母の多くは子供に過剰な期待を寄せて、子供に対して学業成績に偏った評価をしている。」

「子供の弱点教科の学力を補う必要があるという考えは、実は詰め込み主義に流れ、かえって勉強嫌いを作っているという問題を含んでいないだろうか。」

「例えば、父母・子供ともに塾依存性でよいだろうか。『考える努力』を捨てた『教えてもらう子』をつくってはいないだろうか。子供があきらめの感情によって形だけ勉強していないだろうか。」

これらのもっともな指摘は、しかし、「塾」を「学校」と読みかえても成り立つのではないでしょうか。仮に学校だけの問題ではないにしても「教育」関係者が一方的に「塾」にその責任があるように言ってしまうのは、納得がいかないのです。

私見をのべさせていただくならば、「塾」の過熱は、共通一次試験の○×方式や、塾があることそのものに原因があるのではなく、社会そのものが競争原理で支えられていて、現在の学校教育、とりわけその管理にあたる人たちも、それに一役かっているからではないか、と思うのです。「教育」関係者が進学塾の宣伝に不愉快な思いをするのは、ある意味でのホンネが、その宣伝によって露骨に叫び立てられるからなのではないでしょうか。

むろん塾といっても、９割方の零細塾は、おそれおおくも、学校というような巨大組織にたてつくことはできません。しかし、大手の進学塾ともなると、資金の量に比例して、その発言も歯に衣きせぬものになってきます。

「いわゆる“学歴社会”の中で競争に勝ち抜いていくことの大切さを正面から肯定する本音の教育機関。それが私塾です。我々はとかく否定的なイメージを持つ“学歴社会”という言葉をより積極的なものとして把えています。学力を身につけることによってどんな職業にも付くことができ、経済的な保障を勝ち取ることのできる社会。学歴社会は情実や身分によって拘束されることのない、その意味での極めて平等なシステムを持つ社会だといえるでしょう。」（三島地区への開校にあたって〈佐鳴学院〉）

こうした、企業としてのホンネに対して、正確な反論のできる「教育」関係者はそれほど多くないように思います。こうした「見解」は、何も大手進学塾に独特のものではなく、ぼくたちの国を吹きあれている、性急な競争と利潤の原理であることを考えると、とてもタテマエだけで口封じのできるものではありません。

「ホンネ」と「タテマエ」の二大怪獣の対決は気がすむまでやっていただくとして、ぼくたちは一人の親、一人の市民として、学校とは、学ぶとはどんなことなのか、子どもとともに、少しづつでも築いていく他はありません。

それは、無条件の前提―例えば、国家的要請に応える、とか、企業の究極の目的としての利潤とかいったものから下向きに展開される「教育論」とは比べものにならない難しいしごとなのでしょう。けれどすでに、地道な努力をつみかさねている人々が点在しています。そうした人々の意見を大切に聞き、伝え、なによりぼくたち一人一人がほんとうに確かなものを把んでいかなくては、と思うのです。

（伊豆長岡町在住）

自然は生きているみんなのもの

今、私たちの住む地球では、便利さや快適さを求める生活によって、地球というすばらしい自然が破壊されつつあるのではないでしょうか。

ひとりひとりが生活を見直し実行することで、少しでも自然を守れるのです。生活を見直すほんの一例として牛乳パックの回収をしましょう。

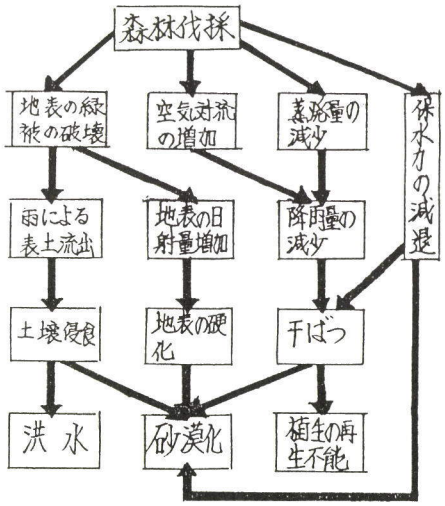
なぜ 牛乳パック回収なのか

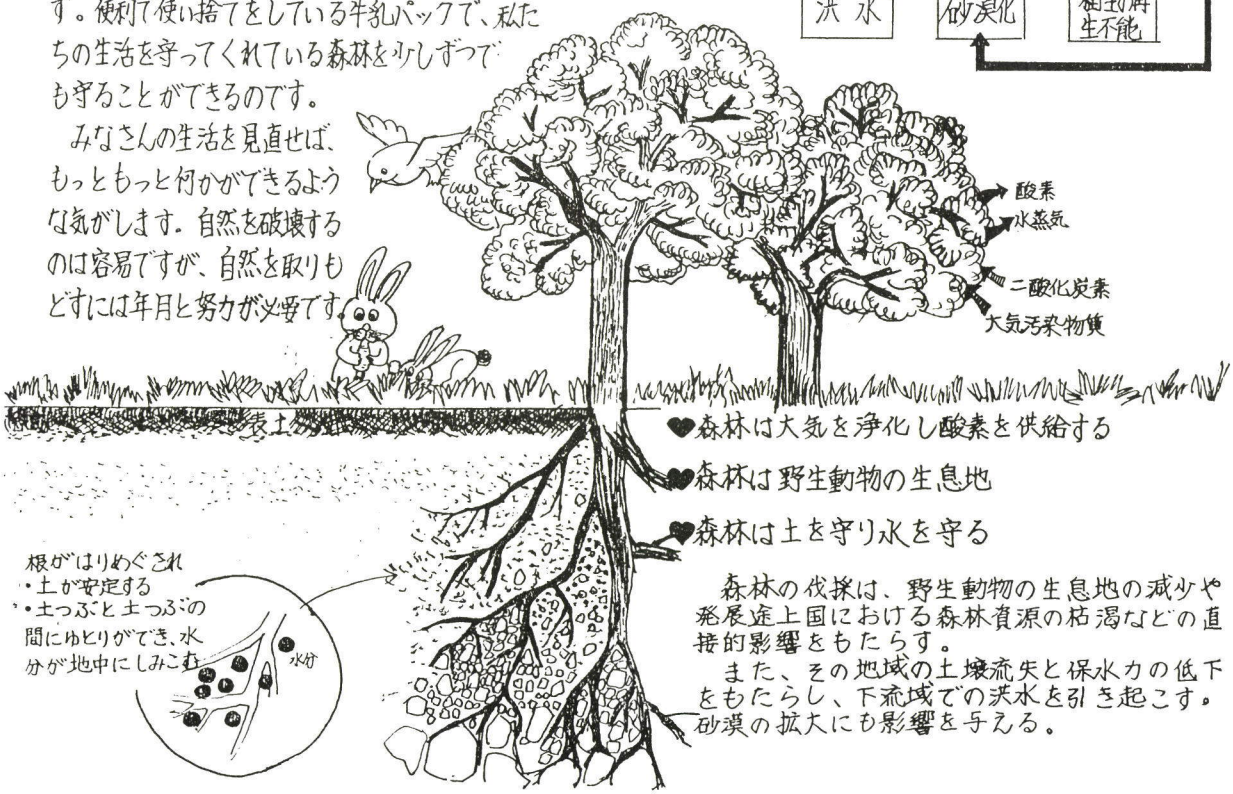
日本は、故紙を効率よく再生する国だそうです。私たちがごみとしている牛乳パックは、その故紙の中でも最も上質です。その証処に、牛乳パックから手軽にはがきや名紙などに利用できる和紙をすくことができます。どうぞためしてみてください。

回収されたパック6個でトイレットペーパーが1個再生できます。回収、再生によって、紙をつくるための原木を切らずにすむのです。ある資料によると、その数は現在使用されているパックの1%を回収し再利用すれば1年間で23400本の木を守れるそうです。

木、森林は、私たちが生活する上でとても大切な役割を果たしています。便利で使い捨てをしている牛乳パックで、私たちの生活を守ってくれている森林を少しずつでも守ることができるのです。

みなさんの生活を見直せば、もっともっと何かができるような気がします。自然を破壊するのは容易ですが、自然を取りもどすには年月と努力が必要です。





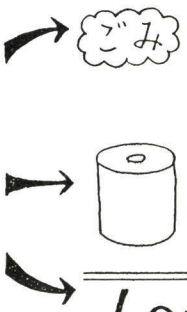
♥森林は大気を浄化し酸素を供給する

♥森林は野生動物の生息地

♥森林は土を守り水を守る

森林の伐採は、野生動物の生息地の減少や発展途上国における森林資源の枯渇などの直接的影響をもたらす。

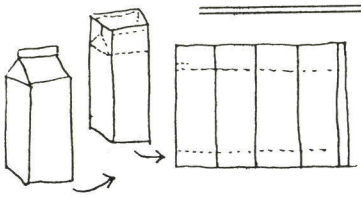
また、その地域の土壌流失と保水力の低下をもたらし、下流域での洪水を引き起こす。砂漠の拡大にも影響を与える。



牛乳パックは良質なパルプが原料です。ごみにするのは**もったいない**。
1％の再利用により、年に23,400本の木を切らずにすみます。
かけがえのない自然をあなたも一緒に守りましょう。

製紙工場で、トイレットペーパーに変身（パック6枚でトイレットペーパー1個）

Let's try!



牛乳パックの保存のし方

牛乳が空になったら、口をあけ水でよくすすぐ → 1枚の紙状に広げる → 油分を洗いおとす → よくかわかす

①

パックのビニールをはがす

・パックをうすく2枚にはがす。
・ビニールをはがしやすくする。
　重曹を溶かした水（重曹4~5g/ℓ）に2、3日浸す。石などを載せてどっぷりとつける。
　煮つめる
　どちらの方法でも良い。
・ビニールをはがす。

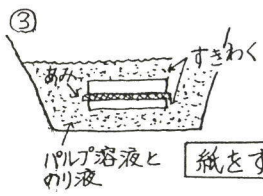
②

パルプを細かくする

・はがしたパルプを1センチ四方ぐらいに細かくちぎる。
・ミキサーに水1ℓに対しパルプ10gを入れどろどろになるまでかきまぜる。
・大きな容器にパルプ溶液とのり液を入れてよく混ぜる。

のり液の作り方―水1ℓに対しコーンスターチを大さじ1まぜ2、3分沸騰させる。

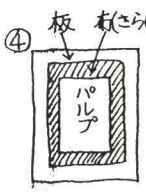
パルプ溶液（水、パルプ）とのり液の割合
水10ℓ、パルプ100g、のり液250cc ⇒ 10枚のはがき



③

紙をすく

・すきわくでパルプ溶液をすくう。パルプの厚さが均一になるようにする。
☆パルプの繊維で草花が少し隠れるように草花を入れてもよい。



④

脱水・乾燥

・板の上にしわをのばした布（さらしがよい）を敷く。
・すきわくをはずし、布の上にあみのままひっくりかえす。空気が入らないよう注意する
・パルプがはがれないようあみを指で押さえながらあみをはずす。
・何枚分かを重ね一番上に板を載せ両手で板を押さえ水を切る。最後は体重をかける
・パルプを取り出し布の上からアイロンをかける。
・風通しの良い場所でかげ干しをする。

ベビイ・カムズ・ストレートダウン

―鈴木助産院物語―(1)

小野　登志子

それまで喘ぎ喘ぎ部屋中をのたうち廻っていたアンナと、傍でまるで自分が産気づいたかのように彼女と共にヒーフー、ヒーフーと腹式呼吸に励んでいた彼女の夫のYは、突然二人して掛け布団をくるくると丸め始めた。

「ホワッツ・ザ・マター！ワッツ・アー・ユードゥーイング？」

一体全体何を始めるというのか――実際、アメリカ人の陣痛はこんなにも激しいものか、それとも堪え性が無いのかと、俊子は母の能子と看護につきながら顔を見合わせるばかりであった。フランス系というアンナの白い大きな顔は、収縮が始まり力が漲ってくると薄い皮膚を透かして真赤になる。欧米人にしてはそれ程彫りの深い顔立ちとは言えないが、眼窩の奥深く淡い緑色を湛えている眼は、痛みにつれて険しさを帯びてくると、疑り深いような眼差となる。そしてその眼におおい被さっている金髪は、極期の長い陣痛が始まると呼吸に合わせて大きく波打ち、さながらライオンの武者ぶるいを思い起こさせる。昭和五十三年のこと、まだ一般にはラマーズ式なる分娩法がそれ程普及していなかった頃、アンナと夫Yはしっかりと呼吸法をマスターして、健気にも分娩の最もつらい時期を自分達で乗り越えようとしていた。だが、身長百八十センチ、体重八十五キロとなると唸り声はまるで吼えているといった方がよく、アクションも大きいので看ている方はど肝を抜かれてしまう。しかも、こんなことをもう三日もやっているのだ。

「日本のおさーんばさんのところでベビイを産みたい。」

お産婆さんの産をさーんと伸ばしアクセントをつけてアンナは言った。不思議なことに、そのように発音されるとこの言葉は急に明るさを放ちはじめた。今でこそ「おさんばさん」という言葉は親しみやすく聞えなくもないが、物心ついた時から「お産婆さんの子」と呼ばれてきた俊子にとって、それは蔑みの言葉のように響く時もあった。だから、この外人に信頼のこもった口調でそう言われた時、俊子は三十三才にしてほのぼのと世界が明るくなったような気がした。カリフォルニア大学で芸術を専攻していたアンナは日本人男性のYと結婚して、日本の古典や東洋美術の研究に来日、ライターを職業としていた。寄留先の三島からはるばる韮山の狩野川河畔にある「鈴木助産院」を訪れたのは昭和五十二年十一月のこと、ブロンドの巻き毛を肩に垂らした愛くるしい顔立ちで、とても三十三才にはみえなかった。

先代から数えて七十年になんとする「鈴木助産院」を引き継いだ鈴木能子は、この道一筋六十年の押しも押されぬベテラン助産婦なのだが、幼児からの人見知りする性格は今だに変わらない。よくまあこれで仕事を続けてこれたものだと思うが、よくしたもので、その育ちの良さからくる彼女の世辞の無さは、大方妊産婦には好意をもって受けとられてきた。だから、めんどうなことは全て俊子にまかせておいて自分は分娩術に専念するしかないと覚悟していた。アンナが来院した時も、診察室からちょっとのぞいて見て、彼女が大型の外人女性だったので隠れてしまおうかと思った。しかし、彼女の人なつこい笑顔にほだされて思いとどまると無理して笑顔をつくったが、顔がこわばって逆に怒ったような表情になってしまった。アンナが能子の膝に手を置き、どうしてもここでお産をしたいと言うと、ようやく落ち着きを取り戻し、いつもの自信に満ちた「先生」の顔となった。そうなると能子は強い。二度三度と検診を重ねるうちに可愛さが増し、彼女の母親になったような気分でいた。俊子は同い年の気安さからアンナと意気投合し、片言でベケットやイオネスコを論じ合ったりもした。アンナを囲む人々は、皆でいい関係を育てながら「鈴木助産院」初の青い目のベビーの誕生を心待ちにしていた。

分娩予定日の二月二十七日を二週間過ぎた三月

十日朝、徴候をみてアンナは入院してきた。だがお産はまだまだ遠い。アンナは和室で体操をしたり、三島由起夫や安倍公房の英訳版を読んだりしていた。夕方になってやっと子宮の収縮が現われた。初めは規則正しい軽快な息づかいをしていたが、夜が更けるに従って荒くなり、次第に唸り声に変ると遂にはウォー、ウォーと吼えはじめた。隣室の産婦達は、その声に恐怖を感じて眠れなかったと、翌日口々に訴えた。しかしながら、いくら唸っても吼えてはみても娩出期陣痛にはなっていない。Yは彼女と一緒に呼吸法を試みながら懸命に背中をさすっていた。外が白みはじめると共に陣痛は少しづつ遠のいてゆき、やがて収まってしまった。高齢初産にありがちなパターンで、子宮の筋肉や靭帯の組織が硬く、子宮口が開くのに時間がかかるのだ。彼女はそれを承知してかペインなどとは決して言わない。信念を持って自然分娩を希望する人は、長時間の陣痛に耐え、少々のことには動じない強さをもっている。まして彼女はアメリカ人。断固として自分のことは自分でやる。何かしてあげようと思っても、ノー・サンキューとにっこり。昼になると陽差しのやわらかな狩野川堤を、昨夜の大さわぎは何処吹く風とばかりにのどかに散歩していた。

そして十二日、かなりきつい収縮が続くようになった時は、もう既に真夜中の三時半を廻っていた。分娩室に入るように促すと、分娩室はノー・サンキュー、畳の上、布団の上でお産をするんだと、てこでも動かない。布団に両手をついて身体中で呼吸をすると、金髪はふさふさとまるで獅子がたて髪を振るわせるかのように波打った。突如としてアンナと夫は、掛け布団をくるくると巻くと彼女の背中の下に入れた。

「ワッツ・アー・ユー・ドゥーイング！」

（背中の下に布団を丸め込んだりして、一体全体どうしようっていうの？）

俊子が聞いた。この頃になると、陣痛はこれでもか、これでもかというように波状攻撃をかけてくる。アンナは肩で大きく息をすると顔をきっと上げ、緑色の眼をランランと光らせて叫んだ。

「ベイビー・カムズ・ストレートダウン！」

（赤ちゃんはね、真っ直ぐにどーんと降りて来るの。だからね、こうやって布団を丸めて背中の下に置いてすべり台のような姿勢にしておくの！と多分言っているのだろう）

「ノー・ノー・ベビイカムズ・アップダウン。」

「ホワァイ！」

「ベイビイズロード・イズ・アップダウンカーブ。カービング！」

（産道というのはね、骨盤の形に沿って円を描くように上り坂になっているの。ベビイはそこをゆっくり回転しながら出てくるのです！）

ここからがお産なのだ。ここからが。胎児は狭い産道を身体をねじるようにして進んでくる。腰がガクガクと揺れる位の怒責陣痛となってはじめて、強い腹圧が加わる。産婦のいきみと胎児の勢いでやっと少しずつ進むが、最後に突然馬鹿力が入り裂傷をきたすこともあるので、産道に沿って徐々に娩出を図らなければならないのだ。

だが、あっという間もなかった。パッツンと音がしたかと思うと、白い胎脂の浮んだ透明な羊水がさあーと流れ出すと同時に、まるで魚が泳ぐようにしてベビイが飛び出してきたではないか。ベビイ・ハズカム・ストレートダウン。しかも、臍の緒が児の肩に巻きついたというのに。

アンナを囲んで皆はしばしベビイに見とれていた。時は四時十分。思えばこのお産、最初から何も手を下さなかったではないか。アンナは勝手に来て、勝手にさわぎ、勝手に産んでしまった。呆気にとられている能子と俊子を尻目に、元気に産ぶ声をあげた彼は、みるみるうちにピンク色に染っていった。

俊子の祖母で能子の母、鈴木とよが大正七年助産婦を開業して以来、薄い罫紙に毛筆で丁寧に書き綴った「出産人名簿」は「鈴木助産院」の大切な宝物である。黒皮の表紙のこの名簿は厚さ三十センチにもなっており、およそ二万名に近い人々の名前が記されている。そして又、出産記念写真の貼られたアルバムも数十冊に及ぶ。

ずしりと重いアルバムの何冊目かを繰ると、庭の真ん中、「鈴木助産院」自慢の百年を越えた梅の古木の前で、少女のように耳の後ろで金髪をお下げに束ねたアンナが、眩しそうな目をしたジェイムズを抱っこして椅子にかけ、艶然と微笑んでいる。ジミーはと言えば、空色の地に金糸銀糸で刺繍した大きなトラの吠えている祝着を着けている。それは俊子の長男の百一衣の祝着だ。この祝着をここで生まれた男の児らが何人袖を通したことか。碧眼の坊やの前途を祝したこの数葉の写真は、いつ見ても微笑みがこぼれてくる。

グループ紹介

浜石絵に魅せられて「アトリエ石川」

古谷君子

石川季彦氏の考案された浜石絵の魅力は、荒波にもまれた大小さまざまな浜石に、石に合った絵を描き上げていくことである。形に合った線を引きながら、最後のまとめをするまで、どんな絵になるか作者にもわからない。写実でなく、偶然と創作があつまった、当初から頭の中で考えることのできない絵が石の画用紙の中には生まれる。

面想筆で息を殺し、一筆一筆仕上げる作品には、集中力、根気、熱中度などがそのまま表れる。

現在、町の文化祭に出品する他、民芸品として、土肥の景勝地である恋人岬を訪れる若者達に恋人証明書と共にプレゼントしている。又、町営の国民宿舎ふじみ荘で販売されている。

今後の夢は、石川氏の十年間に描き上げられた作品を展示する美術館を建てたいこと、又、良い作品に挑戦する創作意欲を持ち続けたいこと等である。

（カット　石川季彦）

手をつなぐ太陽たち

元始、女性は太陽であったと平塚らいてうは言う。私達は今太陽であろうか。それとも太陽でありたいという思いを胸にくすぶらせている光の子供だろうか。

学びたいこと、言いたいこと、行動したいことがたくさんある。そんなみんなが手をつなぎ輝きをましていくときこの世界はもっと美しくなるにちがいない。

手をつなぐ太陽たちの活動を紹介します。

よりよい世界に「大見小読書クラブ」

山口八千代

子供達に「本を読みなさい」「勉強しなさい」という前に、親達がまず本を読み、勉強しようという母親のつぶやきから大見小読書クラブが生まれて七年たちました。

本の購入や御指導など先生方にもたいへん御苦労をおかけしていますが、今、続けることの大切さを痛感しています。

最初の頃は梶井基次郎の「檸檬」や井上靖の「しろばんば」を読んで湯ヶ島へ、永井路子の「炎環」を読んで韮山、修善寺へ、芹沢光治良の「結婚」を読んで芹沢文学館へというように文学散歩を楽しんでいました。また主人公の生き方に自分達を重ねて話しあっているうちに、生きていく上での悩みを語りあったりして、学ぶことと同時にかけがえのない友人にもめぐり会うことができました。子供達が本を読むようになったのも収穫の一つです。

昨年は犬飼道子「人間の大地」を読んで、私達の資源の消費が結果として世界の飢えに苦しむ子供達を死に追いやっているということにショックを受けました。「人間の大地」の印税が全額飢餓難民に寄付されると聞いて、中伊豆町文化祭においてこの本を売ると同時に募金活動をして全額国連難民高等弁務官事務所に送ったのです。そのお金は緑の木一本運動の資金として使われ、いまごろは私達の木がアジアかアフリカの裸の大地で葉をそよがせていることでしょう。これからも寄付を続けていきたいと思っています。

このように私達は自分たちの身のまわりから世界に目をひろげはじめています。

今年は「赤い夕日の大地で」を読んで戦争の問題を、「母の言い分」を読んで老人問題を考えました。次は環境汚染についての本を読みたいと計画しています。

本を読むこと学ぶことによって自分達も成長していく。そしてこの世界をより良いものとする力となること。その思いを子供達、友人達にも伝えていくこと。これが私達の願いです。

子どもたちが卒業してもこのいごこちのよい読書クラブを卒業しない会員もいるのです。

絵本の価

「青い鳥絵本の会」

磯部信子

二年程前までは、絵本というのは、私の中で本ではなかった。本というのは読む人にとって、人生を変えるほどの力を持つという想いをもっているので、絵本は、子供の暇つぶしのお話ぐらいにしか思っていなかったのであるが、この考えは、絵本とかかわって天と地がひっくり返る程に見事に変わり、もはや絵本は、私達家族の生活の中で、貴重な楽しい位置にしっかとあぐらをかいている。

子供の活字離れが騒がれて、いつのまにか定着しつつある体さえ見せている今（最も、それ以上に大人の活字離れがあるのではないかと思っているが）子供が一人歩きを始める前に絵本と出逢ったことを、幸せに思う。このまま子供が本好きになって、栄ある文学者に等とは到底思われないが、人生の基礎を造る時代に本の楽しさを覚えさせてやれたことだけでも誇りにできると信ずるからだ。

最近、『子供の発達と児童文化』という本を読んだ。自分の心が代弁された思いがしたので、その一節を引用したい。

『児童文学というのは子供読者にとっては、人生の先輩である大人の作家が、みずからの生の経験とそこから得た知恵をもとにして探究し発見し到達し創造したところの、人間とその生き方に関する、さまざまの姿を、そしてそれらの中にこめられた真実を、子どもへの愛と理解をこめて、作品化したものである。子ども達は、そうした作品世界を、興味と感動をもって体験することを通してまだ自分では直接に経験したことのない未知の部分が多い、人間や人生の世界がもつところの喜びや悲しみとか、珍しさや不思議さやおもしろさとか、多様性や複雑さ、微妙さなどを知ることのできる、いわばそれは、自己充実、自己拡充の喜びを味わうことになる。そのことはまた同時に、子ども達にとって、みずからの中にある人間性の発見と、自分の人生に対する愛を呼びさますことにもなる。このことは、彼らの人生に対する、豊かな知恵や教訓や励ましなどを提供することにもなるのではないか。－児童文学というのは、まさに〈人生の文学〉であるといわねばならない。』

当にそのとおりなのである。文化を支える大人達に伝えたい。

こだわる女たちの「ミルクフレンド」

平井和子

毎週火曜日の朝、しぼりたての産直牛乳が丹那盆地から、大仁・修善寺の拠点に届きます。拠点にドサッと降ろされた牛乳を、会員の主婦たちが配達係になってあちこちに散らばる小さなポストへ運びます。そして、各自もよりのポストへ牛乳をとりに行く。これが「ミルクフレンド」の大まかなシステムです。

「ミルクフレンド」－牛乳を通して手をつないだ私たち－という意味。「いい牛乳が飲みたい！」と牛乳一本にこだわる者たちの声と熱意によって、六十二度三十分間の殺菌（パスチライズ）という理想的な低温殺菌牛乳が生まれました。高温殺菌・LL牛乳が圧倒的多数を占め、牛乳の常温流通化が進む中で、その流れとは全く逆のパス牛乳づくりに踏み切った丹那牛乳の勇気と「いい牛乳がつくりたい！」「日本の酪農を守るんだ」という生産者の意気込み。それを、牛乳を飲むことによって支えたい、と思う消費者。この関係によって「ミルクフレンド」は成り立っています。

工場では、新しい設備を作り、学習を重ね、パス牛乳専門の酪農家を八軒置いて、無農薬のエサを中心にして、より本物に近い牛乳つくりに精を出しています。そして栄養たっぷりの新鮮で安全な牛乳が私たちのもとへ届くのです。

「毎日飲むものだから本物ではなくちゃね」「牛乳をしぼってくれる人の顔、見学に行けば牛の顔までわかって、ああいい牛乳を飲めてるんだな－と思う」－これが私たちに共通の思いです。

食品添加物・農薬・薬の問題などは、その厳しい現状から「必要悪だから…」とか「死にゃあしねぇ」などとへんに納得して目をそらしがちですが、私たちは現状をしっかり見据え、そこからスタートすることにしました。特に、その人の一生の健康が決定される幼児期、その体をつくる基本になる「食べ物」にこだわることは、親としての責任であると考えています。

「ミルクフレンド」では、他にしょう油・なたね油・無農薬茶・石けん・地粉などを共同購入したり、学習会や見学などをしています。いろんな事が見えてきた私たちです。

谷神の午後

山口八千代

「あら」湯上がりの夫の肩から背にかけてひろがっているそばかすを大きくしたような無数の褐色のしみを見つけてチモは驚きの声をあげた。心が敏感に伝わったらしく、お腹の中で二人目の子供がビクッと動いた。「こんなおじいさんのしみみたいなものがどうしてできたのかしら。」禍々しいものが夫の背に翼をひろげているような不吉な感じがしてチモの顔は曇った。夫はプラスチックの原料メーカーの研究室に勤めている。薬品が飛び散って手をやけどしたり、ツーンと鼻を刺激する薬品の匂いを髪の毛にとじこめて帰ってくることもたびたびあった。東京オリンピックの年をさかいに東京は人間の住む街ではなくなりはじめていた。腐らないコンクリートとプラスチック、鉄がかさぶたのように街を醜くおおっていた。

「逃げようよ。緑の船に。マプリチュちゃんに乗って。」二才の真理子が離したことのないピンクの小花模様の小さなタオルケットをチュクチュク吸いながら言った。この子はときどき予言者のように詩人のことばを話すのだ。おふろの中でキッコンキッコン泳ぐおもちゃの亀は真理子のお気にいり、マプリチュちゃんと名づけていた。ぜんまい仕掛けの亀に乗ってこの街をでていく。チモと夫は顔を見合わせて「ウーン」とうなった。

「パパがこんなに早くおじいさんみたいになって死んじゃうと困るのよネ。」チモの一家はまあるい形の方向指示器がパタンと上る時代ものの車に乗り、東京を逃がれて漂流の旅に出た。伊豆の山奥の小さな谷間の村を走っていると「あっ、緑の船」と真理子が言う。両側を低い緑したたる山がはさみ先に行くほどせばまっている。その底を龍骨のように小さな谷川が流れている。わずかな平地になつかしい人の手のぬくもりを見せて段々田んぼがひろがり、風の流れがサワサワと稲を吹きわけて通りすぎていく。大きな自然のふところにだかれているようなほっとする気持がわきあがってきて「ここに住もうか」と夫がつぶやく。

夫が会社をやめて誕生したばかりの二人目の子供もいっしょにこの村に移り住んだ時には梅の花びらが風に舞い散り谷間を一ぱいに満たしてチモたちを歓迎してくれたのであった。未熟児で枯枝のように生まれた二人目の子供には「お花が咲くから咲子ちゃん」と真理子が言ったので咲子と名づけた。「花咲山」という絵本の中の女の子のように人の幸せを願う心の優しい子どもだった。

都会へ都会へと地方の人々が流れ出していく時代であった。過疎になることにおびえる村の人達はあたたかくこの一家を迎え入れてくれた。もう人の住まなくなってしまっている百年もたったわらぶきの農家をおどろくような安い家賃で借りて新しい生活がはじまった。

「老子の中に谷神という思想があるんだが、谷は山の実に対して虚・空の存在であるというんだ。谷は二つの山によって成り立ち自らを主張しない。それでいながらそこには一切の水が流れ入りすべての命をはぐくむ源泉となっている。この谷神こそもっとも尊いものだと老子は考えている。谷神の象徴しているもの、それは一切を受け入れる包容性・無我・虚心なんだ。人より勝りたいという心・過度の要求・欲望が人間や社会を汚し、争いごとのもとになっているんだよネ。この谷はまさに谷神のふところだ。ぼくたちも谷神の心で生きたいね。」と夫は言った。「谷神の思想で生きられる土地こそほんとうに人間の土地なのね。」

チモたちの毎日は輝いていた。物がなく金もないくらしのさわやかさ。れんげの田んぼでねころんで蝶になり、蜂になり、獏になる。密蜂の羽音を聞きながら子どもたちと花輪や首飾りを作る。「ママへのプレゼント」と夫のさしだしたれんげの指輪はどんな宝石よりもまぶしく、チモの指によくにあった。時間は亀のマプリチュに乗っているようにゆっくり進み、笑い声と歌でうめられていく。夕食の膳にはれんげの花の酢のものとタンポポのサラダが幸せな一日の象徴のようにのっていた。

夏になると谷には無数の螢が群れ飛んだ。子供たちはチモの縫ったゆかたのそでにたくさん螢を入れて「かぐや姫〳〵」と歌いながら闇の中を舞った。「愛してる」チモがたずねると夫は

「ぼくの心に聞いて」と言う。夫のシャツの左の胸ポケットでは無数の螢の光がフワッフワッと明滅している。

童話のような暮しをしていたチモたちも子供が学校へ通うようになると少しずつ社会の歯車に組み込まれはじめた。「おまえんち貧乏。」同級生の男の子に言われて涙をためて帰って来た真理子をみてふつうの暮しの誘惑が黒い手をのばしてきた。誕生日には手づくりのケーキと野の花で祝い、手づくりの服、古いセーターで作ったうさ子ちゃんと遊び一度も貧乏と感じたことのない子供も、おべんとうの日に赤く染まったウインナーや肉だんごをたくさん持ってくる男の子に貧乏とさげすまれてひどいショックを受けたようだった。物やお金がなくてもほんとうの豊かさ。心が貧しくない暮しをわかってもらうには子供は幼なすぎ、社会の通念はブルドーザーのように傍若無人であった。人と違うことを許さない社会がやわらかな子どもの心をひきさいていくのをみることはとてもつらい。違っているということで仲間からはじき出されそうになる敏感な心の子どもを守っていかなくてはならなかった。

手さぐりではじめた陶器作りの仕事がぽつぽつ軌道に乗りはじめ、だんだん注文に追われるようになるとれんげの田んぼで一日過す日をみつけるのはだんだんむずかしくなっていった。仕事に追われはじめてからの月日は新幹線の早さで走り過ぎていく。亀のマプリチュは屋根裏のおもちゃ箱の中でほこりをかぶりいつのまにか二十年がたっていた。

一つ一つ石をつんだ人間の手のあたたかさを感じさせる谷間の村の小さな段々たんぼが、ある日やって来たブルドーザーであっという間にならされ、つくしやふきのとうの宝庫だった草の土手はあっという間に城壁のようにそびえたつコンクリートの土手にかえられてしまった。農業を機械化するのに便利だという広い田に作りかえられたその年の夏、谷間の螢は二・三匹飛んだだけであった。山の頂上の窪地には隣の町のごみ焼却場の残灰がすてられて、プラスチックやビニールのもえかすから灰の中に濃縮された鉛やカドミウムが、雨にとかされ地にしみ入り、谷に流れ込むようになった。どこにも逃げられずとうとう離陸できなかった緑の船は、ところどころに立ち枯れた木をまじえ落葉の季節をむかえている。谷川のせせらぎは見た目には同じように美しく弱い冬の光を反射させながら無心に流れていく。

谷神不死　老子
是謂玄牝
玄牝之門
是謂天地之根
綿綿若存
用之不勤

谷神は死せず。是を玄牝と謂ふ。玄牝の門、是を天地の根と謂ふ。綿々として存するが若く之を用いて勤ず。

（山室三良訳）

ゴミ・ごみ・護美・GOMI

ゴミは出しちゃえばもう消えてしまうのだろうか？ゴミの中身や、捨てられてからどこへ行くのか、その行くえも考えてみよう。

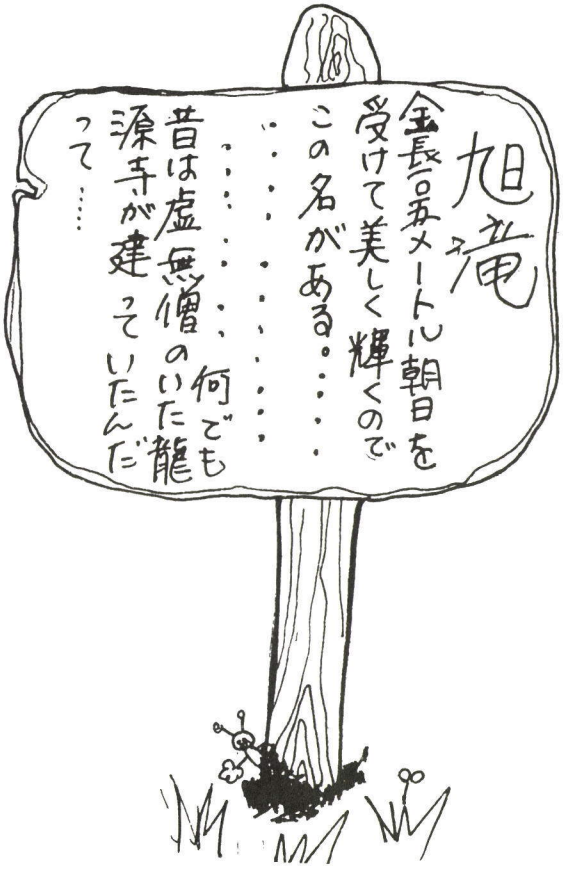
例えば、プラスチック、ポリ袋・ナイロン製品やしょうゆの容器・カップラーメンのカップ・おもちゃ・発泡スチロールなど、私たちの身のまわりにあふれています。プラスチックは石油からできていて、成分の中から有害な物質がとけ出し、その安全性が問題になっています。そして、ゴミとして出されたプラスチックは燃やすと、焼却炉をいためるし、ダイオキシンという猛毒を発生させてしまいます。じゃ埋めちゃうとどうなるかというと、やっぱりいつまでもくさらず、土や海を汚染し続けるのです。身近かなことですぐできることは、食器やおもちゃなど、なるべく木や竹など自然の素材を使った品物を使うように心がけることですね。

いい場所見つけた

北　南子

創刊号おめでとう！南子の最初のいい場所見つけたは、〝旭滝〟どぇーす。ルート一三六沿いで、修善寺町大平・中宿付近から西側へ二百メートル入った山あいにあるんだぜ。交通の便だってすんごくいいんだ。

伊豆箱根鉄道の終点、修善寺駅で、降りて、東海バスの、三・四・七番線から出ているバスのほとんどが、旭滝の前を通るんだ。（但し、七番線の、中伊豆温泉病院行はだめ×でーす。）



旭　滝

大平地区のほぼ中央、国道136号大平中宿付近から西側へ200メートルほど入った山あいに、朝日をあびて落ちる一条の水しぶきが見える。この滝の名は、この風情から生まれたものであろう。高さ32丈（約100メートル）で、水は六段になって落ちている。基盤をなす岩は旭滝玄武岩で、細長い柱の石を積み上げた溶岩で、柱状節理がよくわかる。

虚無僧寺（功徳山滝源寺）

滝源寺は旭滝の近くにある滝泉寺の奥の院として建ったお堂で、虚無僧が住みつき、滝源寺といったが、いまはない。滝源寺跡は、滝付近の中段にある墓石の、享保四年（一七一九）の刻字から、推そくするのみ。いまの石段と丸い石橋は、大正時代に、公園式につくったものである。

東海バス

三番線	松崎、土肥、船原　方面	二五本
四番線	湯ケ島・浄連の滝　昭和の森　方面	五一本
七番線	ラフォーレ・柿木　方面	八本
	中伊豆温泉病院　方面	

旭滝口バス停にて下車
修善寺駅からおよそ、十分
バス運賃は　一八〇円

○　○　×

滝頭遺跡・大塚遺跡

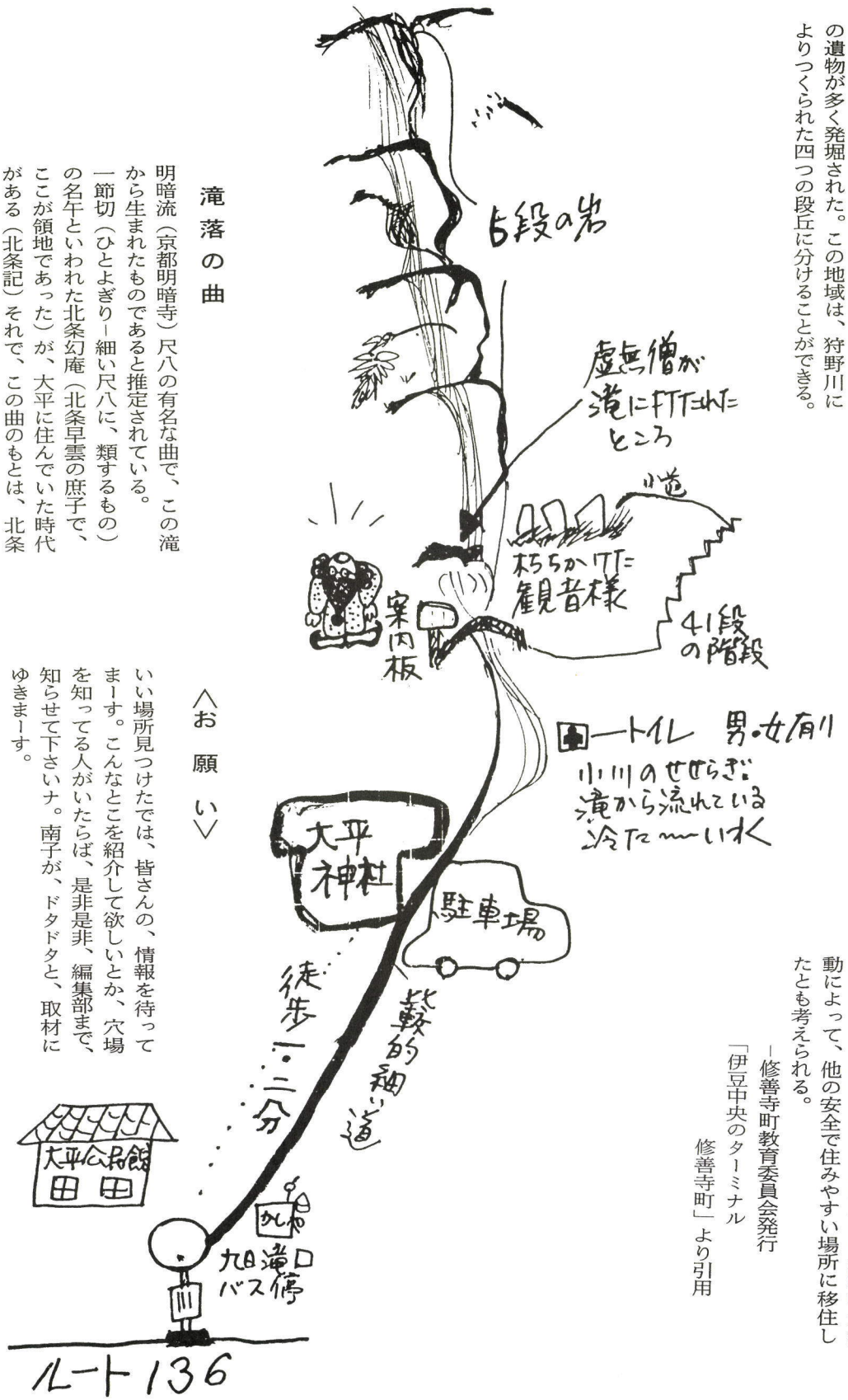
旭滝の上の平担地から、縄文早期（六〜七千年前）の土器が出土している（滝頭遺跡）。大平地区の田地から、縄文時代中期（約四千年前）の遺物が多く発掘された。この地域は、狩野川によりつくられた四つの段丘に分けることができる。

狩野川がつくった大平の段丘には早くから人びとが住みついた。昭和五五年の圃場整備工事のとき、土器類の出土があり、発掘調査が行なわれたが、再びうめられた。田んぼの周辺で土器片を見ることもある。（大塚遺跡）縄文後期の遺物を最後にその後この地には全く人の住んだ気配が見当たらない。軽石まじりの火山灰（黄土軽石類）の直下に遺物があることから、天城原火山の長期噴火活動によって、他の安全で住みやすい場所に移住したとも考えられる。

—修善寺町教育委員会発行
「伊豆中央のターミナル
修善寺町」より引用

滝落の曲

明暗流（京都明暗寺）尺八の有名な曲で、この滝から生まれたものであると推定されている。一節切（ひとよぎり—細い尺八に、類するもの）の名午といわれた北条幻庵（北条早雲の庶子で、ここが領地であった）が、大平に住んでいた時代がある（北条記）それで、この曲のもとは、北条幻庵ではなかろうかという人もある。



〈お願い〉

いい場所見つけたでは、皆さんの、情報を待ってまーす。こんなとこを紹介して欲しいとか、穴場を知ってる人がいたらば、是非是非、編集部まで、知らせて下さいナ。南子が、ドタドタと、取材にゆきまーす。

私たちと法律

「憲法は私たちの宝物』①

石田恭子

去年、一九八七年五月三日は、日本国憲法が制定されて、四十周年を迎えました。この日新聞・テレビ等のマスコミは、例年のように憲法の擁護を訴える集会と、憲法の改正を訴える集会とを等しく報道していましたが、それは、四十周年を特に強調する様子もありませんでした。

しかし、国の政治の最も基本となる規範であり、私達国民の生活の究極的な拠り所となるもので、何よりも私達の暮らしを守ってくれる最大の味方であるはずのものです。その憲法が誕生四十周年を迎えたのですからその節目にふさわしいような、国家及び国民挙げての祝典が為されてもよかったのではないでしょうか。

しかし、あれほど遵守されてきたはずの軍事予算のGNP比一%枠がはずされ歯止めを失ってきた事、また、スパイ防止の観点からの国家秘密保護法制定の動き、さらに、政府官僚による靖国神社公式参拝の強行等、今日の政府の動き、それを暗黙に認めている政治状況をみますと、無理からぬことども思います。

加えて、それ以上に日本国憲法の改正（改悪？）を主張している政党が、憲法制定時（直後の一時期を除いて）から常に政権を担当してきた事実を踏まえますと、むしろ当然の成り行きともいえそうです。

それでは一体、国民主権原理を採用し、徹底した民主化を謳っている我が日本国憲法は、改正の必要があるのでしょうか。私は、そうは思いません。

そこで、改正を主張している論拠が果たして合理性の有るものなのかどうか、検討してみます。

まず一般的に言われている第二次大戦の戦勝国であるGHQからの「押しつけられた憲法である」という事についてですが、押しつけられたという場合、誰にとって「押しつけられた憲法」というのでしょうか。それは、旧憲法下で庇護されていた人達にとってではないでしょうか。その事はGHQ案が政府に示された時、受けいれに対して抵抗する政府に対して、GHQ側は、直接国民に提示することを示唆したところ驚いて政府が受け入れたという事実が物語っていることでしょう。誰よりも国民自身が心からこの民主的憲法を受け入れたのです。このことから解りますように、「押しつけられた憲法である」という主張は、余りにも形式的に捉えた論議と言えましょう。

次にもう一つの改正の論拠となっている憲法九条の戦争放棄について述べます。もはやこの点については、核戦争を想定しなければいけない今日においては、むしろ、世界各国が日本国憲法と同様な規定を成文化することが急務となっているはずです。この点からみましても憲法第九条は、改正どころかより遵守しなければならないものと思います。

このように、改正の理由と言われている点には、何ら合理的理由はありません。

しかし、私達国民がそれに関心を持ち、この価値ある宝物を心の片隅に置いて、埃をかぶせているようではいつの間にかまた、「いつか来た道？」という事になるかもしれないのです。

だとすれば、私達国民一人一人は、憲法によって守られている日々の暮らしに直接には影響を及ぼさないと思われる政府の行動、例えば、官僚による靖国神社への公式参拝など憲法の精神を踏みにじるような事については、反対の意思をはっきりと表明しないといけないと思います。

それは、関心・無関心ににかかわらず、現行憲法によって私達の生活が守られているからです。また、先人達の尊い犠牲によって誕生した日本国憲法を享受している私達の務めであると思います。

ちょっと、息ごみすぎて、思う分だけ書けていない気がしますが、私は、理想高く人権の尊重を謳い、格調高い平和を宣言するこの日本国憲法を、風化させることなく私達子供の為にも是非とも守っていくことが、大切なことだと思うのです。

日本国憲法第九条〔戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認〕①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。②前項の目的を達成するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権はこれを認めない。

欲張らずにはいられない

杉山早苗

春の陽をあび、子どもたちとれんげの花を摘む
ゆったりとした楽しいひとときこんな時がほしくて好きな仕事を捨てた

三人の子どもを追いかけ、クルクル動き回る
時間は分刻みで過ぎてゆき
空間は窓から見える空だけになっていった
「〇ちゃん、うちの子がすべるからどいてくれる？」　公園で自分の口から出た言葉にぞっとした
いつのまにか
自分の子どもしか見れない母親になっていた
ひどく孤独で狭められた世界にいた

何かしなければ—本を読もう
小さな図書室の本を全部読み尽そうと
次の日から
末っ子を乳母車にのせ二人の子の手を引き図書館に通い始めた
とじこめられた淋しさを
あらゆる本を読むことで埋めた

やがて、子どもの手が離れ
私は急にうろたえた
母や妻としての私は存在していたが
“杉山早苗”としての個人はどこにもいなかった

「私って何だろう？」と自問し続け
成長している夫がむしょうに羨ましかった
あがきの日々は何をしても虚しかった
—そんなに欲張らなくても良いのに—
—三人の子を育てているだけで満足すべきだよ—
とまわりの人は言った
適当に辻褄を合わせていけば
じゅうぶん幸福だと錯覚して生きてゆける
何もかもわかっていて
どうしても自分をごまかせなかった

ちっぽけな自分が見えてくるとうなだれ
もっと自分の世界にとじこもっていった
苦しかった
ある日　自分をそっと抱き寄せてみた
小さな自分をすなおに受け入れ
ゆっくり大きくしていこうと思った
少し　らくに生きてゆけるようになった
自分の生きるテーマをもち、自分を大切にしている幾人かの友だちに出会えた

自分の言葉で話したい
あらゆる方向から見れる自由な目がほしい
わからないことは学んでゆきたい
学んだことがみんなの役に立つともっと良い
—人間としてどう生きるかにこだわると
欲張らずにはいられない
大きく大きくなりたいから
そして“良い女”になりたいから
欲張り燃えて生きていたい　（函南町在住）

「草の指環」すいせんの店デース！

駆け出し記者が行く

朝日新聞、沼津支局　高槻忠尚　①

はじめまして。伊豆の女性たちがネットワークを結んで作ったこのミニコミ誌に、登場し、貴重なページを食いつぶしているのは…。高槻忠尚。ペンを持って二年目、駆け出しの新聞記者です。

日ごろ女性にはあまり縁のない僕ですが、どういう事の成り行きからか、女性たちの中で文章を書くことになりました。新聞記者というのはみなさんにとってなじみの薄い職業だと思います。あるアンケートによると、若い女性が抱く新聞記者のイメージとは、『うさん臭い』『プライバシーに土足で入り込む』などだそうです。かなりショックですが、実際そういうこともあったし、報道（マスコミ）と人権というのは大テーマです。

しかし、みなさんのまわりにも、みなさんと同じ日常をすごし、人を好きになり、人に興味を持っていろんな話を聞きたがっている、同じ『ひと』としての記者がいることを知ってほしいのです。『ああ、こんなふうに考えている記者がいるんだな』と思ったら、僕のことを隣りのお兄ちゃんとか、息子とか、弟とか恋人のつもりで気軽につかまえて、ふだん感じていることを聞かせてください。

まずは自己紹介、出身は福島県。名前は年寄り臭いけれど、小錦と同じ花のサンパチ生まれで三歳。独身。一人暮らし。顔の特徴は目が細く、眼鏡を使用。髪は天然パーマ。中肉中背。しごく健康だが、借金多し。　新聞記者になりたい、と真剣に思ったのは大学二年の終りごろ。きっかけは朝日記者本多勝一の一連の著作を読んだこと。『殺す側の論理』とか、『殺される側の論理』とか。一貫して『～される側』の視点でものごとをとらえ、明快な論理で読者の心に訴える。『あんな記事が書きたい』という気持ちが、記者志望の動機だったのです。

初任地の沼津支局に来て2年目。いまは市政担当です。要するになんでも屋。興味のタネはつきません。沼津、三島、駿東、田方地区をカバーしています。僕がいま一番興味を持っているのは『教育』です。現在の教育は、明らかに歴史のコースを逆戻りしているのではないかと思うんです。先生の役割ってなんでしょうか。英語や数学ができる、というたった一つのモノサシ（偏差値）で、生徒を商品のように冷たく輪切りにして、これまたきれいにランクづけされた中学、高校、大学に送り出す。いくら学業以外のことに長じていようが、テストの出来が悪ければ相手にしない。個性は無視され、規則規律でがんじがらめに管理している。いろんなやつがいていいんじゃないだろうか。

『体罰』は、生徒への人権侵害の典型です。最近取材した沼津市内のある中学校の例です。その中学校では、遠足に菓子類を持っていってはいけないという規則があるそうです。秋の一日、一年生四百人が湖に向かった。そのうち三十数人が、禁止されている菓子を持参し、こっそり食べた。それが見つかった。目的地で、それぞれの担任がその三十数人に対して『指導』しているうち、六人の男性教師が平手打ちを加えた。（父母らの話では、往復ビンタで顔がはれあがった生徒や、足でけられた生徒もいたという）。

『ただの平手打ちか。けがをしたわけでもない、そんなに大騒ぎするほどのことでも』と考えるかもしれません。が、重要なのは体罰の程度ではない。平手打ちを加えられた生徒の心です。先生に『お前なんか湖に沈んで死んでしまえ』といわれて傷ついた女子生徒の心です。力で抑えつけるのは教育とは異質のものだ。体罰は絶対にいけない。

悲しいことに、体罰はどの学校にもあります。父母の中には『その程度なら日常茶飯事よ。抗議して内申書に悪く書かれるより、卒業までがまんしたほうが』と考える人も多いようです。でもそれじゃあいつまでたっても変わらない。なによりも子どもたちがかわいそう、いま、ここでこの問題を真剣に考え直す必要があると思うのです。

なにげなくあたりを見回すと、『どうしてこんなことがまかり通るの』『ちょっとおかしいんじゃない』と感じる事が意外に多いものです。それは黙ってちゃいけない。何が問題かをよく考えなきゃ。僕だって黙っちゃいませんよ。まだ新米だけど、記者としてピーンとアンテナを張りめぐらして、そういうことをどんどん聞いて記事にしたいと思っているんです。

へんしゅう後記

生活に生き方に意見のある人が、好き！流されるのではなく、自分で頭をひねって考える人が、大好き！そういういい仲間に出会えて大変な一歩を踏み出しました。う…ん。またまた忙しくなりそう。（平・和）

花が大好き。そこにいるだけで心がなごんでしまうそういうミニ・コミ誌になれたらいいなあ。と思っています。……の永田

12月はかぜをひいて…鼻水…啖…私の頭の中って納豆がつまっているのかと悩みました。できあがって……ほっ

ホホホの磯部

よい仕事をしたあとで一杯のお茶をすする……。太宰治の章句が思い浮かぶ。とにかく創刊。が、これからが大事。研鑽と錬磨を決意。石田恭子

この小さな雑誌を通して、色々な出会いができたらいいなと思います。

斎藤みち子

自然を守り、平和を愛し、物質文明に流されたくない心の象徴としての「草の指環」季刊で発行の予定です。かわいがってくださいね。山口八千代

伊豆・狩野川・ユリカモメ　嗚呼のどか。四十年間・優しい歳月にまどろんでいたら、草の指環の仲間にゆり起されました。小野

私たちは、みなさんからのいろいろなご意見お便り、感想などを待っています。又、グループ紹介や“イイ男”で取りあげてもらいたい人があれば、情報をお寄せ下さい。投稿の場合は紙面の都合で若干カットさせていただくこともご了承下さい。（400字前後）

今回、この手づくりのミニコミ誌を買って下さってありがとうございます。次号はもっとおもしろく、ためになる紙面づくりにがんばります。是非おつき合い下さいネ！　（スタッフ一同）

ご意見、ご感想、投稿は下記

〒410－23

静岡県田方郡大仁町大仁280　斎藤迄。

「草の指環」1号

発行日	1988年1月20日（季刊）
発行所	草の指環編集部
スタッフ	山口八千代　小野登志子 石田　恭子　永田　恵子 斎藤みち子　磯部　信子
編集・責任者	平井　和子
連絡先	0558(72)－6728　（平井） (72)－5914　（磯部）
振込先	東京0－352089「草の指環」
印刷	いさぶや印刷工業株式会社

◁楽しい人々 いらっしゃいませ▷
電車・バスの待ち時間にも
お気軽にお立寄りくださいませ。

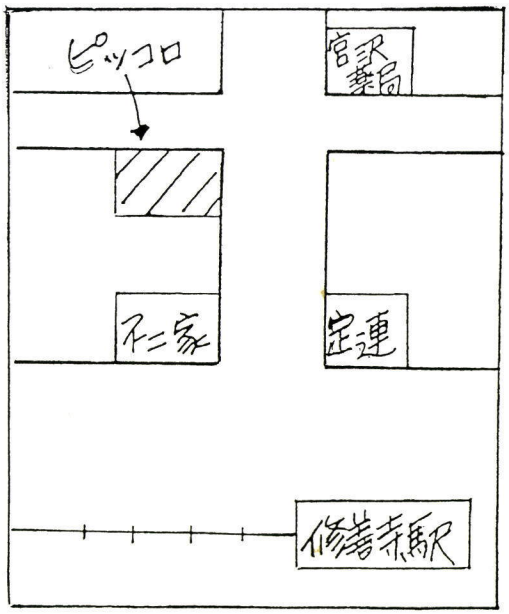
「草の指環」編集部 すいせん!!

▲ベビー
▲チャイルド
▲ミセス
▲マタニティ
▲ファンシー

♫♪ ディスカウント テレフォンショッピング
= バ・ル ール =

当店では カタログショップ バルール
のカタログを約7ヶ月おきに 出しています。
衣類はもちろん 家具、収納庫、小物等
バラエティゆたかな 商品を取り扱っております。
また 配達、発送も うけたまわります。

カタログを 御希望の方は
お気軽に お電話ください。
良いもの より安く 御利用ください。



修善寺駅前 ☎0558－72－6789

ベビー チャイルド ショップ ピッコロ

あそびとくらしをクリエイト …… 星谷 アミューズメント

¥400 1988年1月20日発行「草の指環」編集部1号